

第19回小学校英語教育学会（JES）

# 北海道大会

新学習指導要領全面実施を見据えた小学校英語教育

## 要綱ダイジェスト版



開催日 2019年7月20日（土）21日（日）

会場 北海道科学大学

主催 小学校英語教育学会

共催 北海道科学大学

後援 北海道教育委員会・札幌市教育委員会・北海道英語教育学会

札幌小学校英語活動研究会・札幌市小学校英語教育研究会

札幌市中学校英語教育研究会・北海道中学校英語教育研究会

北海道高等学校英語教育研究会

大会ウェブサイト <http://jes-zenkoku.sakura.ne.jp/2019/>





## 大会日程

### 第1日目 7月20日(土)

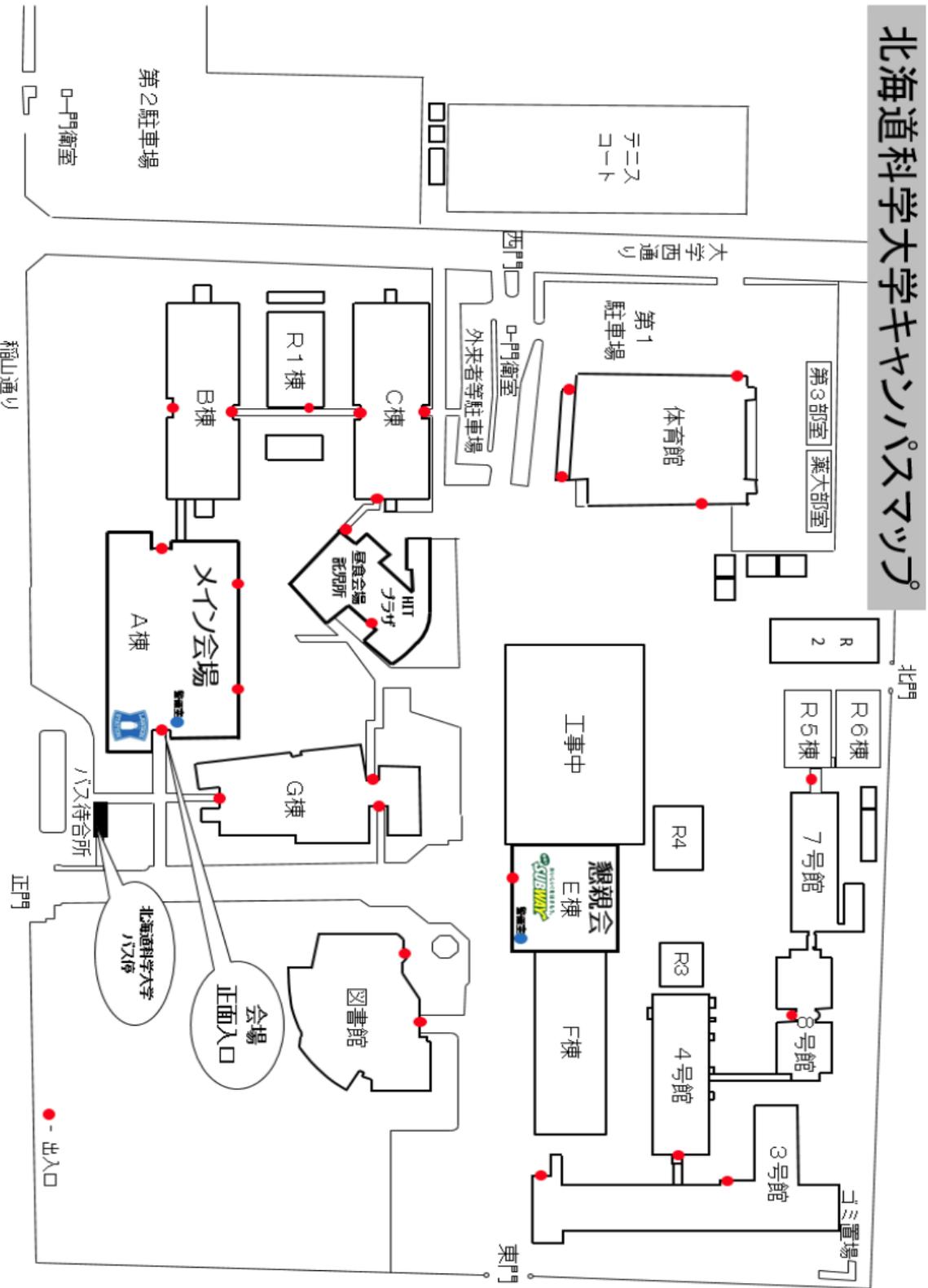
9:00 ～	9:30～ 9:50	10:00～ 11:00	11:10～12:20	12:20～ 13:00	13:00 ～13:50	14:00～ 15:00	15:15～ 16:45	17:15～
受 付	<b>開会式</b>  (A106 他)	<b>授業研究</b>  1～3	<b>自由研究発表 (1)</b> ①11:10～11:40 ②11:50～12:20	<b>昼食・ 休憩</b>	<b>賛助 会員 プレゼン</b> (A106)	<b>ワーク ショップ</b>  1～5	<b>基調講演</b>  (A106 他)	<b>懇親会</b>  (E棟)
協賛企業展示 9:00～17:00 (2,3F ラウンジ)								
<b>ポスターセッション 1 (A309)</b> 11:10 - 13:40 コアタイム 12:30 - 13:30								

### 第2日目 7月21日(日)

8:30 ～	9:00～ 10:00	10:10～12:00	12:00 ～ 12:45	12:50～ 13:30	13:40～14:50	15:00～16:40	16:40～ 16:55	
受 付	<b>課題研究 発表</b> 1～2  <b>特別講演</b> (A106 他)	<b>自由研究発表 (2)</b> ③10:10～10:40 ④10:50～11:20 ⑤11:30～12:00	<b>昼食・ 休憩</b>	<b>総会</b>  (A106)	<b>自由研究発表 (3)</b> ⑥13:40～14:10 ⑦14:20～14:50	<b>シンポジウム</b>  (A106 他)	<b>閉会式</b>  (A106 他)	
協賛企業展示 9:00～15:30 (2,3F ラウンジ)								
<b>ポスターセッション 2 (A309)</b> 10:10 - 12:40 コアタイム 11:20 - 12:20								

- ◎ 開閉会式・基調講演・シンポジウムは、第2会場(A110)・第17会場(A308)・第19会場(A312)に映像が配信されます。
- ◎ 特別講演は、第2会場(A110)のみに映像が配信されます
- ◎ 昼食はHITプラザ食堂, E棟のSUBWAYがご利用いただけます(11:30～14:30)。
- ◎ A棟1Fローソンもご利用いただけます(8:00～17:00)。
- ◎ A棟3FA310教室は参会者休息室です。ご自由にお使いください。

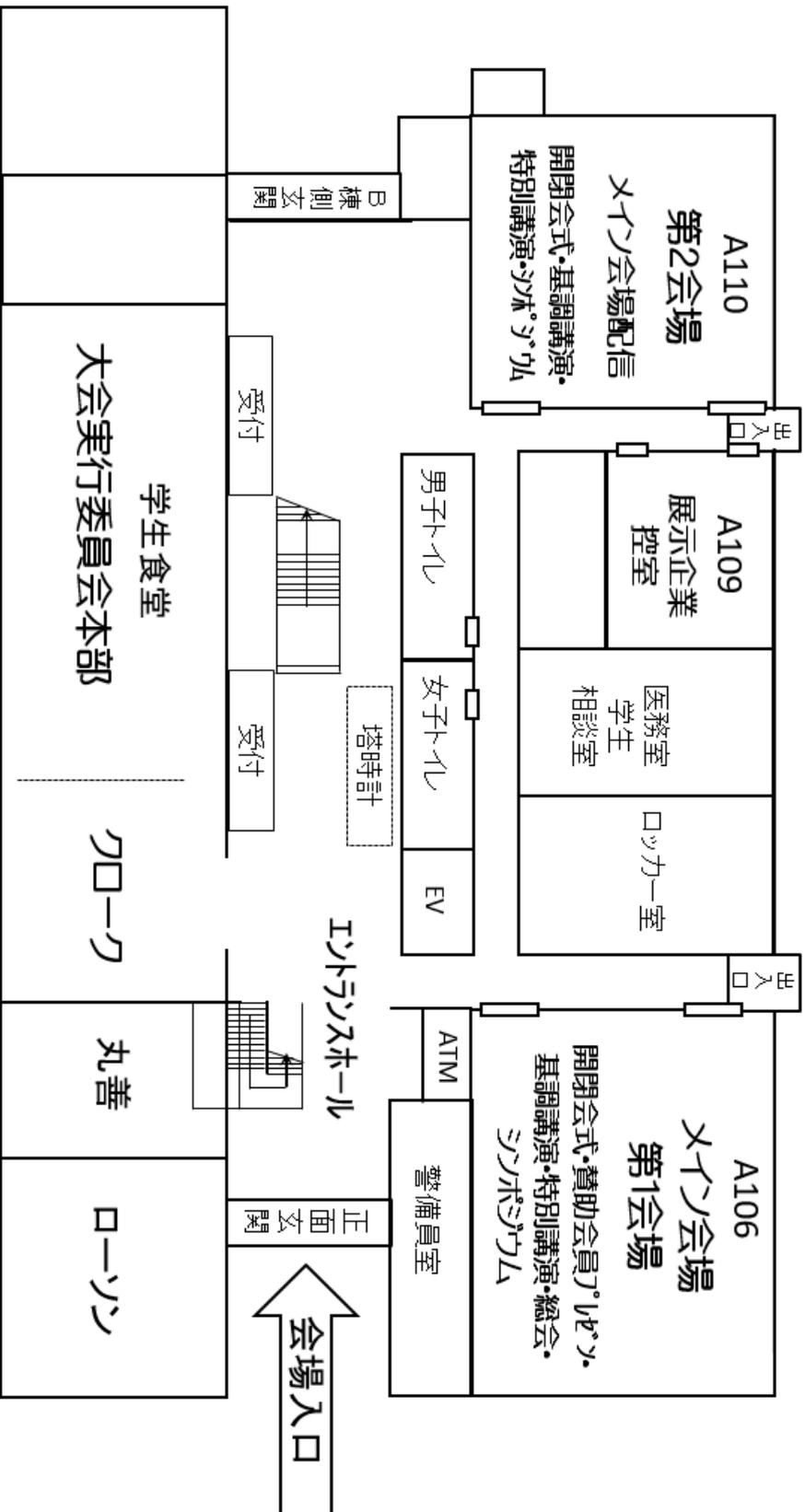
# 北海道科学大学キャンパスマップ



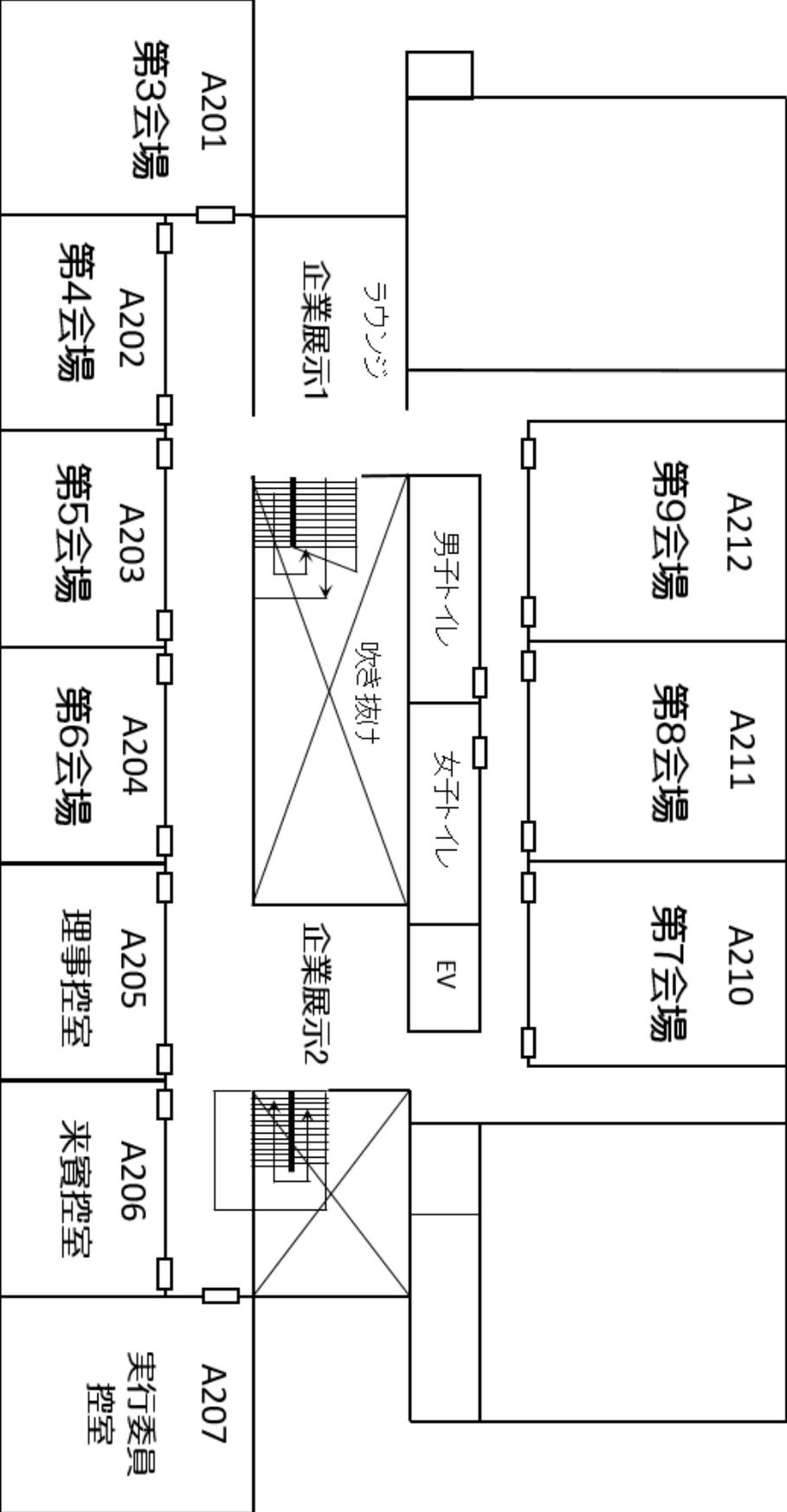
- ・ 昼食はHITプラザ食堂, E棟のSUBWAYがご利用いただけます (11:30~14:30)。
- ・ A棟1Fローソンもご利用いただけます (8:00~17:00)。

# A棟マップ

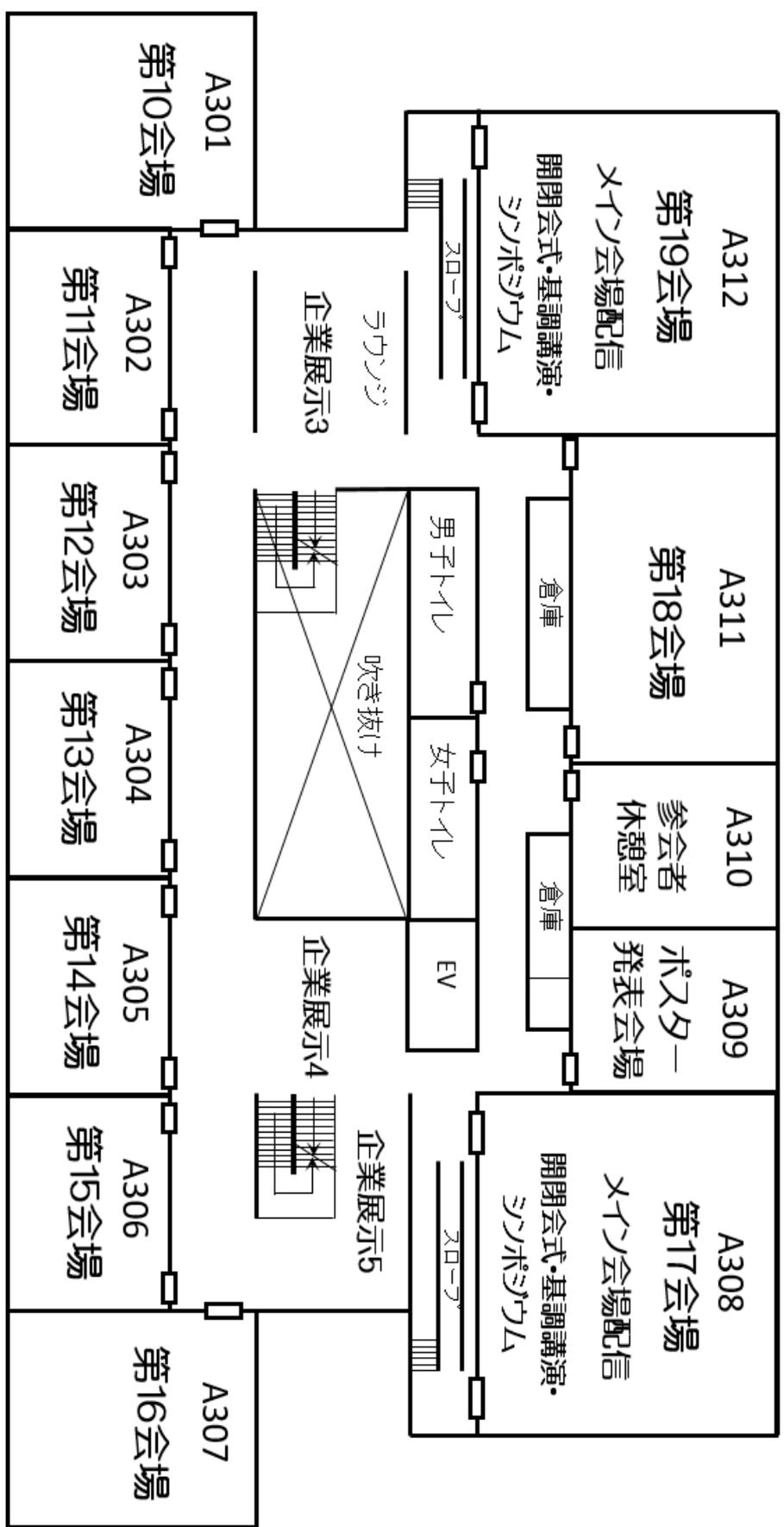
A棟1F



A棟 2F



A棟 3F



・A310教室は参会者休息室です。ご自由にお使いください。



大会1日目 7月20日(土)

9:30～9:50 開会式 【A106他】 司会：岩村 鋭介(札幌市立伏見小学校)  
 ※ 第2会場 (A110)・第17会場 (A308)・第19会場 (A312) に映像配信

10:00～11:00 授業研究 1～3 (ビデオによる実施)

『言語活動・やりとりを工夫した授業の工夫 — 既習語句や表現の活用 — (高学年)』 p. 2  
 【A110】 司会：萬谷 隆一(北海道教育大学)  
 授業者：高橋 文(札幌市あいの里西小学校)

『外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方への気付きが生まれる授業実践の試み  
 — 全体交流によって児童の気付きを促す実践事例の発表 — (中学年)』 p. 4  
 【A308】 司会：堀田 誠(北海道教育大学)  
 授業者：種田 育未(厚岸町立真龍小学校)

『複式学級の授業 — 同単元指導による学習の実際 —』 p. 6  
 【A312】 司会：石塚 博規(北海道教育大学)  
 授業者：久保 稔(名寄市立中名寄小学校)

11:10～12:20 自由研究発表 口頭発表(1) ①11:10-11:40 ②11:50-12:20

司会：深澤 清治(広島大学)				
A110	①	<p>小学校外国語科における言語活動を考える一タスクの視点から—                  白田悦之(函館工業高等専門学校)・志村昭暢(北海道教育大学)・竹内典彦(北海道情報大学)・中村洋(ニセコ町立ニセコ中学校)・酒井優子(東海大学)・山下純一(函館工業高等専門学校)</p> <p>小学校外国語科の教材である We Can! の4技能の言語活動を量的に比較したところ、児童の興味を引き出すようなリスニング活動が多い一方、体験的コミュニケーションを促すスピーキング活動は学年が進むにつれて減少していた。発表では、タスク性(task-likeness)の視点からスピーキング活動の特徴を分析し考察する。また、タスク性を高める活動への改良方法やタスクの作り方についても提案する。</p>	研究	p. 10
	②	<p>小学校外国語における専科教員の意識について                  萬谷隆一(北海道教育大学札幌校)</p> <p>本研究は、小学校外国語における専科教員の意識について質問紙(自由記述を含む)により、1) 専科教員になってからの顕著な変化(指導方法、指導観、児童との関係性、授業運営など)、2) 専科教員と担任教員との役割分担の現状と改善策についての意見、3) 専科教員としての立場のメリットとデメリット等、についての調査結果を報告し、小学校英語における指導者のあり方についてのヒントを得たい。</p>	研究	p. 11
司会：佐々木 雅子(秋田大学)				
A201	①	<p>教員の指導力を支える教材の開発                  大槻友紀(明治大学大学院)</p> <p>小学校英語教育を担う学級担任が本当に求めている支援とは何か? 2019年3月に行った教員の意識調査から未だ強い不安や問題意識が多いことがわかりました。英語の授業に不安を感じる教員が自信を持って授業に臨めるような教員目線に合わせた授業に役立つ教材や指導案の型の提案です。一人でも多くの教員が自信を持って豊かな学びの場を創造できるよう支援の一つとなることを願います。</p>	研究	p. 12

	②	<p>コミュニケーション能力を中心とした英語教材の内容分析 一言語使用場面と働きに焦点を当ててー Wang Wei-Tung (明治大学)・大塚清高(明治大学大学院生)</p> <p>具体的な言語の使用場面を設定することはコミュニケーション能力を養う上で重要な役割を果たす。また、話す相手、場面、話題等の要素は実際の言語活動に影響を与える。このことを踏まえ、小学校英語教材に相応しい言語の場面設定を検討するため、『Let's Try! 1, 2』および『We Can! 1, 2』の指導書の内容分析を行った。会話の具体例を提示しつつ、小学校英語の言語の使用場面と働きについて考察する。</p>	研究	p. 13
司会：丹藤 永也 (青森公立大学)				
A202	①	<p>小学校教員を対象とした発音教材制作についての問題点の検証 眞崎 克彦(関西大学)・山本玲子(京都外国語大学)</p> <p>本研究の目的は、小学校での英語発音指導教材を作成する過程での問題点を明らかにし、小学校での英語発音指導のより望ましい方向性について提案することである。小学校教員を対象としたわかりやすさと母語話者の音声感覚の重視の両立を求めて教材制作することは、様々な課題が生じる結果となった。本研究発表では、発音を記号で表記していく上での課題や問題点を中心に検証、考察を行う。</p>	研究	p. 14
	②	<p>英語のリズム指導における歌の活用 —子どもの歌集の調査結果と指導の実際— 本多君枝(千葉大学研究生)</p> <p>歌は英語のリズム指導に適しているとされる。Songbirds という子どもの歌集 125 曲を調べた。1 音節 1 音符の実現率が高かったことより、歌を通して音節感覚の育成を期待できる。また小節内にある強拍の位置とストレスのある音節が合致するように作られており、複数音節語における合致率は 94.5%であった。この結果から歌は英語のリズム指導に適すると考えられる。英語リズムの体感を促す歌の指導例も述べる。</p>	研究	p. 15
司会：畑江 美佳 (鳴門教育大学)				
A203	①	<p>子音の「音」への気づきを生かす 「音韻認識から初期スペリングへの指導」予備研究 池田周(愛知県立大学)</p> <p>小学校外国語教育において、音と文字の対応についての知識を獲得するためには、音韻認識を高めておく必要がある。本予備研究では、子音字の音を意識させるアプローチで国語科のローマ字指導を受けてきた児童が、どのように音に気づき、それをローマ字と英語による「書き取り」に反映するかを明らかにすることを試みた。その結果を、音韻認識指導プログラムのどのタイミングで「文字との関係づけ」を組むかの観点から考察する。</p>	実践	p. 16
	②	<p>ローマ字学習に難しさを感じる小学生の音韻認識能力 英語学習への連携に向けての一考察 飯島睦美(群馬大学)</p> <p>ローマ字学習の困難を主訴とする小学校3年男児を2年間にわたって指導をした。まずは男児の WISC-IV (知能検査)の結果から特性を分析し、男児が強みとする認知力(音を聴きとる力)を生かし、弱さ(集中力と書き出す力)を補う方法を用いた。具体的指導の方法とその指導の成果を論じ、日本の小学校3年生でのローマ字学習へ提言を行うものである。</p>	実践	p. 17

司会：佐藤 剛（弘前大学）				
A204	①	<b>英単語の読みに関する研究—児童が用いる方略に焦点を当てて—</b> <b>榎原朱梨(広島大学大学院生)</b> 本研究の目的は、英語学習初期段階である小学生の、音声で十分に慣れ親しんだ単語の読みの特徴を明らかにすることである。(1)単語の綴りをみて意味を書く、(2)単語の綴りをみて発音する、(3)発音された単語の綴りを選択肢の中から選ぶ、(4)日本語をもとにそれに対応する英単語を選択肢の中から選ぶ、の4つの調査から明らかになった児童の単語を読む際にみられる特徴や方略について報告する。	研究	p. 18
	②	<b>L2WTC を高めるための小学校外国語科における語彙習得プログラムを含む単元の提案—第二言語習得の認知プロセスを意識した実践を通して—</b> <b>永田眞子(愛知教育大学教職大学院)</b> 本研究は、児童の L2WTC（第二言語で自発的にコミュニケーションを行う意志）を向上させる授業実践の一環である。L2WTC を高めるためには、児童の L2 に対する自信が重要な要素である。そこで、第二言語習得の認知プロセスに基づく「語彙の習得を目的としたモジュール学習」と単元の学習を連携させて行っていくことが効果的ではないかと考えた。本発表では、詳しい実践内容と分析結果を報告する。	実践	p. 19
司会：川村 一代（皇學館大學）				
A210	①	<b>英語の授業における欲求充足が内発的動機づけに及ぼす影響</b> <b>—小学校高学年の児童に焦点を当てて—</b> <b>染谷藤重(上越教育大学)</b> 本研究は、小学校高学年児童の外国語授業への欲求の充足が、外国語学習における内発的動機づけに及ぼす影響について研究を行うことを目的とする。分析の結果、自律性、有能性、関係性の欲求充足からなる外国語授業における欲求充足が、外国語学習への内発的動機づけに強い正の影響を及ぼしていることが明らかとなった。児童の外国語学習への動機づけを高めるためには、授業内でどのような指導・支援を行うかについて言及する。	研究	p. 20
	②	<b>言語活動の特徴からみる児童の好きな英語授業</b> <b>猪井新一(茨城大学)</b> 小学校訪問により英語授業の見学・録画及び児童対象の英語授業に関するアンケート調査を実施した。アンケート調査に基づき、高好意度英語授業 2 例程度と低好意度英語授業 2 例程度を取りあげ、見学当日に実施された英語授業の主な言語活動の特徴を明らかにしようとした。その結果、高好意度英語授業は、意味(meaning)が優先されるが、低好意度英語授業は 形式(form)が優先される傾向が見られた。	研究	p. 21
司会：秋山 敏晴（北海道科学大学）				
A211	①	<b>コミュニケーション能力の育成を図る「わが町紹介活動」</b> <b>小・中学校における「厚真 PR プロジェクト」の実践</b> <b>根岸清人・本村瞬(厚真町教育委員会)</b> 北海道厚真町の 2 校の中学校は、過去 7 年間にわたり、本町の特色や特産物などを英語で紹介する活動である「厚真 PR プロジェクト（以下、『APR』とする）」に取り組み、生徒のコミュニケーション能力の向上を図ってきた。この APR の取組を小学校から開始し、中学校での活動内容をさらにレベルアップさせ、本町の児童・生徒のコミュニケーション能力の更なる伸長を目指した。	実践	p. 22

	②	<p><b>「単元計画ブック」を活用した授業作り 指導者同士の確かな連携を目指して</b> 阿部巧・根岸清人(厚真町教育委員会)</p> <p>英語の授業をチームティーチングで行う場合、担当者が目標や指導手順、評価規準等の授業情報を共有することは極めて重要である。情報の共有化の方法としては「単元構成ワークシート」の作成、その活用が指摘されている(友池、2018)。本研究は、「単元構成ワークシート」の有効性を高めるため、共有する情報の質を充実させ、授業の質的向上と準備の簡便化を図る「単元計画ブック」の作成と有用性の実践検証を目的とする。</p>	実践	p. 23
A212	司会：猫田 和明(山口大学)			
	①	<p><b>小学校教員養成課程学部生への指導実践 小学校教員に必要な読み書き指導の知識・技能の検証</b> 樫本洋子(大阪教育大学)</p> <p>小学校教員養成課程コア・カリキュラムでは、4技能において「授業実践に必要な力」をつけることを到達目標としている。しかし具体的な「習得しておくべき知識・技能」は示されていない。本発表では、発表者がこれまで小学校で児童を対象に実施した読み書き指導の経験と文部科学省が求める読み書き指導の内容から、小学校教員養成課程の大学生を対象に行った「読み書き指導のための講義・実習」の実践を報告、検証する。</p>	実践	p. 24
	②	<p><b>小学校教員志望学生のための海外教育実践体験実習の開発 ダイバーシティを配慮できる知識と技能を身に付ける試み</b> 立松大祐(愛媛大学)</p> <p>小学校教員養成課程で求められる英語コミュニケーション能力の向上と異文化理解についての知識や態度の育成に資する海外教育実践体験実習の開発について報告を行う。大学での事前学習、シアトルでのダイバーシティ研修、各種学校訪問、小学校でのプレゼンテーション、ボランティア、英会話等の活動を通して、参加学生は児童・生徒のダイバーシティを理解し尊重できる知識と態度を身に付けることができた。</p>	実践	p. 25
A301	司会：本田 勝久(千葉大学)			
	①	<p><b>児童が本当の思いや考えを英語で伝え合うために —移行期における6年生での実践の成果と課題—</b> 福原史子(ノートルダム清心女子大学)</p> <p>2018年度、N大学附属小学校の6年生1学級(対象者23名)に、毎週3時間ある英語のうちの1時間、We can! 2を用いた授業実践をした。「本当の思いや考えを英語で伝え合う」ことを目指した授業の中での行動観察や、児童の振り返り、学級担任やALTへのインタビュー等の分析を通して、実践上の成果及び課題を明確にすることにより、今後の小学校英語教育の在り方を考えたい。</p>	研究	p. 26
	②	<p><b>高学年児童の文法知識 —what 疑問文の内部構造に関する知識に焦点を当てて—</b> 内野駿介(北海道教育大学)</p> <p>小学5, 6年生計186名を対象とし、whatで始まる疑問文の内部構造に関する知識を調査した。空所補充課題と文法性判断課題を用い、文法性判断課題には時間制限付課題と時間制限無課題を設定した。分析の結果、①what疑問文の内部構造のうち主語位置に関する知識は他と比べて獲得しづらいこと、②児童の知識は暗示的知識が主であり、明示的知識を獲得している児童は少ないこと、の2点が示唆された。</p>	研究	p. 27

司会：松本 祐子（宮崎公立大学）			
A302	①	<b>新教材を用いたインタラクティブな授業の実践</b> <b>—新教材 We Can!2 の学習活動の再構築を通して—</b> <b>八木澤学(栃木県宇都宮市立田原小学校)</b> 第6学年児童は、新教材 We Can!2 を通し、実に多くの英語表現に出会い、コミュニケーション活動を体験する。児童は新しい学習活動を通して、「もっと聞きたい」「もっと知りたい」という意欲を高めている。本研究では、新教材に含まれる豊富な学習活動を、どのように再構築し、活用すれば授業をよりインタラクティブにできるか、実践を通して検討していく。	実践 p. 28
	②	<b>外国語能力の発達における認知トレーニングの効果について</b> <b>予備的調査結果からの一考察</b> <b>林裕子(佐賀大学)</b> 本研究では、ワーキングメモリ機能の強化を図るトレーニングが外国語能力の発達に与える効果を検証する。第5学年児童を対象に約5週に亘るトレーニングを実施した結果、実験群の英語能力の得点の方が統制群よりも高い傾向が示された。音声による英語のインプットを通してワーキングメモリ機能に働きかける言語性・視空間性活動とその効果について考察する。	実践 p. 29
司会：川上 典子（鹿児島純心女子大学）			
A303	①	<b>デジタルとアナログのよさを生かす</b> <b>—新教材でインタラクティブな授業を—</b> <b>塩井博子(宇都宮市立峰小学校)</b> 教師と児童及びALT三者のインタラクションを活発に行うための新教材の効果的な活用方法について、実践を通して明らかにするために、授業を録画し、どのような工夫や手立てが有効であるかを考察した。その結果、デジタルとアナログのそれぞれのよさを生かすことが重要であることが分かった。教材は児童とインタラクションをとるためのツールであり、それを使ってどうインタラクションにつなげるかが重要だと考える。	研究 p. 30
	②	<b>米国 ELL 教育の成果からみる小学校英語教育の可能性</b> <b>子どもの学びを深める指導技術の一考察</b> <b>西尾由香(アメリカ・ワシントン州 四つ葉学院)</b> ELL(English Language Learner)教育の理論と指導法に着目し、その実践と成果を調査。日本から渡米してきた児童達を対象に、第二言語の英語を習得するまでに受けた現地校での具体的 ELL 指導や使用した教材資料、家庭でのサポートなどについて検証した。ELL 指導法の成果と実践的なアプローチを考察し、児童の英語力習得までの過程を明らかにすることで、小学校英語教科化に求められる多角的なアプローチや、有益な英語指導法の示唆が得られると考える。	実践 p. 31
司会：階戸 陽太（北陸大学）			
A304	①	<b>年少英語学習者向け読み物教材の難易度推定</b> <b>—英文解析プログラムによる言語的特徴の分析に基づいて—</b> <b>名畑目真吾(筑波大学)・木村雪乃(獨協大学)</b> 本研究では、年少英語学習者向けの読み物教材の難易度を、英文解析プログラムによる言語的特徴の評価に基づいて推定することを目的とした。複数の出版社から初級・中級・上級の年少学習者向け読み物教材を63冊選定し、英文解析プログラムによって各教材の言語的特徴を単語、文、文章全体の観点から分析した。機械学習の手法を用いた分析の結果、これらの言語的特徴に基づいて教材の難易度を高い精度で推定できることが示された。	研究 p. 32

	②	<b>教員養成における児童文学(ライム、物語、ことば遊び)の扱い方</b> <b>—米国“The Core Knowledge Series” 幼～小6の分析より—</b> <b>衣笠知子(園田学園女子大学)</b> 小学校教員養成におけるコア・カリキュラムの「児童文学(絵本、子ども向けの歌や詩等)」の扱い方を、米国の“The Core Knowledge Series”(E. D. Hirsch 著)の幼児から小6までの8段階のライム・物語・ことば遊びの分析から考察する。また、日本の小・中・高学年にふさわしいライム・ことば遊びの選択の糸口を検討し、具体例を示す。	実践	p. 33
司会：巽 徹(岐阜大学)				
A306	①	<b>外国人観光客にインタビューしよう！</b> <b>—恥ずかしさや失敗を気にすることなく短い文や単語で話しかけよう—</b> <b>大谷五十二(びわこ学院大学)</b> 外国語活動を修学旅行先の奈良や広島で実施。グループに分かれ質問内容を考え、外国からの観光客にインタビューする。児童の中には英語が好きな子ばかりとは限らない。毎時間ゲーム中心の活動ばかりで落ち着いて考える活動がおろそかにされているように思う。短い文や単語で話しかけ、恥ずかしさや失敗を気にすることなく積極的にコミュニケーションが取れるようになった。旅行先で出会った観光客から手紙が届いた。	実践	p. 34
	②	<b>小学校英語で身につけた力は中学入門期にどう推移するのか</b> <b>小柴和香(四天王寺大学)</b> 小学校英語の教科化に向け円滑な小中接続は喫緊の課題である。本発表は小中接続実現のための準備段階として、小学校英語教育の成果が中学入門機にどのように変化するのかを追った探索的調査の報告である。小学校英語教育の成果に焦点を当て、児童が身につけた力が中学入門期にはどのように指導すればどのように変化するのか調査した結果を実践報告する。調査結果より今後の小中接続に向けての手立てを提案する。	実践	p. 35
司会：多良 静也(高知大学)				
A307	①	<b>電子辞書を活用した小学校児童のための参加型文字・単語指導</b> <b>—絵本教材を活用した児童とのやりとりを通して—</b> <b>佐藤久美子(玉川大学大学院)・鈴木さおり(玉川大学)・塚原享(カシオ計算機(株))</b> 町田市教育委員会は2018年度より、「町田市放課後英語教室」を開催している。そこで、英語に対する興味をさらに引き出すために、電子辞書に載っている絵本の一部の絵を使い、英語でやりとりしながら文字や単語を指導する方法と、従来の絵カードを用いた場合の効果を検証した。昨年の1学期は電子辞書の1枚絵を用いた方法に統計的な有意差が出たが、検証を続けたところ、児童の学力によりその効果が異なることが判明した。	研究	p. 36
	②	<b>用法基盤モデルの言語習得観にもとづく小学校英語の展開</b> <b>—プレハブ表現を足場かけとした教室コミュニケーション能力の育成—</b> <b>村端五郎(宮崎大学)・村端佳子(宮崎国際大学)</b> 用法基盤モデルの言語習得観では、文法に依存せず一塊として使用されるプレハブ表現が創造的言語使用への足場かけとなる重要な役割を果たすとされる。この理論にもとづき教室という場に特化したプレハブ表現の習得に重点を置いて実践を進める小学校では、英語で流暢にやり取りのできる児童が育ち、創造的言語使用へと着実にその成果をあげている。本発表では、プレハブ表現を足場かけとする小学校英語の有効性を明らかにしていく。	研究	p. 37

司会：上原 明子（都留文科大学）				
A308	①	<p><b>小学校高学年児童の英語能力と英語学習に対する意識の関係</b>  <b>—英語が「よくできる」子はどのような意識を持っている児童か—</b>  <b>田中真紀子(神田外語大学)・河合裕美(神田外語大学)</b></p> <p>6年児童の英語能力試験（①語彙能力，②音—文字一致能力）の結果を元に、上位群と中位群間の英語学習に対する意識（③英語能力の向上心，④英語授業への関心，⑤英語能力の自己評価）の違いを探った。英語力が上位の児童は中位より③④⑤が高い。一方、中位の児童には「書く」、「理解する」という自己評価が見られなかった。このことは「できる子」とそれほどではない子の英語能力の分岐点となっていると考えられる。</p>	研究	p. 38
	②	<p><b>小学校教員志望者の認知的成長のプロセス</b>  <b>現場教員との英語プロジェクトを通して</b>  <b>池田真生子・今井裕之・竹内理(関西大学)</b></p> <p>本研究の目的は、小学校教員志望者が、現職教員との英語プロジェクトにおいて認知的に成長する際に、どのような過程を経るのかを、ケース・スタディとして追跡調査することである。参加者（1名）に対し、刺激再生法によるインタビュー（60分）を実施し、文字に起こしたデータを質的に分析した。その結果、小学校教員志望者の認知的成長の過程には、情意の揺れや、振り返り行動、協働学習などが関係することが明らかとなった。</p>	研究	p. 39
司会：倉田 伸（長崎大学）				
A311	①	<p><b>小学生の英語の文構造に関する知識</b>  <b>—模倣発話タスクと文法性判断課題の結果に基づく予備的検討—</b>  <b>江口朗子(愛知工科大学)</b></p> <p>本研究では、小学5年生の英語文構造の知識を測定する方法としての模倣発話タスクと文法性判断課題の結果に影響を与える要因を、課題文の文構造（統語構造）と学習者の語彙サイズに焦点をあてて一般化線形混合モデルで分析した。その結果、統語の処理ステージには、学習者の言語知識レベルが反映されており、語彙サイズの大きい学習者ほどその言語知識レベルが統語処理ステージに与える影響が大きいことが明らかになった。</p>	研究	p. 40
	②	<p><b>AI(人工知能)搭載ロボット MusioX を活用した、小学校英語学習における可能性—計量テキスト分析(テキストマイニング)による分析と考察—</b>  <b>金子淳(山形大学)・米野和徳(山形県教育庁)・山口常夫(東北文教大学)</b></p> <p>小学校の英語学習にAI, 人工知能ロボットを活用することを試みる。児童に、AKAが開発したMusio Xと、授業やそれ以外でコミュニケーションを取ってもらった。その学びの様子を自由記述してもらい、KH Coderで計量テキスト分析を行った。Jaccard係数で「外部変数なし」と「外部変数あり(学年・性別)」の共起ネットワーク図, 対応分析図等を描画させ、分析し、効果を検証し、AI活用の可能性を探った。</p>	研究	p. 41
司会：横川 博一（神戸大学）				
A312	①	<p><b>国際理解教育と小学校英語教育を結ぶカリキュラムの提案</b>  <b>—知識・スキル・態度はどのように育つのか—</b>  <b>阿部始子(東京学芸大学)</b></p> <p>研究期間の2016-2018年度に行った授業を概観し、国際理解教育と小学校英語教育を結ぶカリキュラム作りの基本的な考え方と使用した教材、We Can!1/2との関連性について述べ、実践に役立つカリキュラム提案を行う。また、研究期間に授業を受けた児童・生徒（中学生を含む）を対象にインタビュー・アンケート調査を行い、彼らの異文化に対する姿勢や意識について分析し、カリキュラム作成の留意点を考察する。</p>	実践	p. 42

	<p>② <b>小学校英語の政策過程 1984-2017</b> 寺沢拓敬(関西学院大学)</p> <p>【目的】小学校英語をめぐる政策形成過程の特徴の解明。政府の公式見解——要するに結論——だけでなく、その結論がどのように導き出されたのか、実際の審議過程を検討することで明らかにする。</p> <p>【方法】1980年代から現在までの政府審議会の審議過程を検討。</p> <p>【結果】次のような知見を得た：(1) 委員間の合意なき政策決定、(2) 委員の人選の偏り、(3) 具体的な施策立案・決定における官僚サイドのイニシアチブ。</p>	研究	p. 43
--	---	----	-------

11:10-13:40 自由研究発表 ポスターセッション(1) (A309)

コアタイム 12:10-13:30

a	<p><b>Bilingual and Multilingual ALTs A New Era</b> Sean Mahoney (Fukushima University)</p> <p>小学校の英語授業の実施体制は各地域・各学校によって様々であり、いわゆる英語のネイティブスピーカー以外の方が ALT 等として授業に関わっているケースも増えている。本発表は日本、ペルー、ブラジル、フィリピン出身者の外部支援者とのインタビュー調査データ(12名、約16時間)を基に、英語教育へのアプローチ、成功点や反省点又は改善点、そして望ましい英語授業の在り方について述べたものである。</p>	研究	p. 44
b	<p><b>音声言語と文字言語を結びつける指導の提案</b> 「読むこと」「書くこと」の前におくこと 粕谷恭子(東京学芸大学)</p> <p>「読むこと」「書くこと」の指導が注目され、文字をどう音声化するか、文字からどのように情報を引き出すかという指導が行われつつある。本発表では、音声を出発点にていねいに文字への導き、どんな児童も無理なく音声言語から文字言語へと英語世界を広げられる指導の具体例を提案する。その際、5つの領域をそれぞれ独立したものととらえず、連続体の中でとらえる。</p>	実践	p. 45
c	<p><b>歌やチャンツから書く活動へ 質問紙による予備的調査</b> 川井一枝(宮城大学)・鈴木渉(宮城教育大学)・栄利滋人(仙台市立国見小学校)</p> <p>本研究の目的は、小学校英語で多用されている「チャンツ」の役割を検証・考察し、学年に応じた効果的な提示方法や指導法を提案することである。2020年度には小学校3年生から外国語活動がスタートすることを踏まえると「チャンツ」という同じ素材であっても、児童の情意面や発達段階に応じたきめ細やかな指導が必要と考えられる。本発表では、まず予備的調査として6学年を対象とした質問紙調査の結果を発表する。</p>	研究	p. 46
d	<p><b>外国語科における多文化多言語に開かれた姿勢の育成を目指して</b> 尾関はゆみ(東京純心大学)</p> <p>本研究は、児童が体験を通して世界の多言語多文化の存在を実感するとともに、そこに住む他者とつながるために、自らの感情や意志を伴った言語使用ができるようになるためには外国語科でどのような指導ができるか、小学生を対象にした大学の公開講座の実践をもとに明らかにすることを目的とするものである。なお、本講座は、2018年10月～2019年1月に実施した全6回の連続講座である。</p>	実践	p. 47

e	<p>外国語習得の素地を作る複言語教育 低学年児童に対する「言語への目覚め活動」からの示唆 大山万容(立命館大学)</p> <p>「言語への目覚め活動」は、言語的少数派のバイリンガリズムを支援するとともに、すべての子どもの外国語習得の素地を作る教授法として確立されている。本研究は、日本の低学年を対象にした教材開発の経緯と、発表者が公立小学校で行った低学年児童への実践とを報告する。複数言語を同時に扱う方法により、英語を含む様々な言語について、学習者の主体的な学習をもたらすこと、それを実現するための条件を同定する。</p>	研究	p. 48
f	<p>三重県南部地域における小学校外国語複式版年間指導計画の実践 平成 30 年度の A 町の取り組み 大野恵理 (三重大学)</p> <p>三重県南部は東紀州と呼ばれ 35 の小学校があるが、過疎化のため 19 校に複式学級がある。筆者らは、単式学級の授業時数を半分に圧縮して 5~6 年生の 2 年分の学習内容を 1 年で学習する「東紀州版複式版年間指導計画」を開発した。さらに効率よく授業を展開するための指導案や教材を作成して三重県南部の教員に公開した。A 町で行ったアンケート結果によると、全ての学校で指導計画どおりに学習を進めることができた。</p>	実践	p. 49
g	<p>L2WTC と関連要因の年齢差による影響 小学校 3 年生~中学校 3 年生を対象とした横断的質問紙調査から 物井尚子(千葉大学)</p> <p>本研究では、小学 3 年生~中学 3 年生までの 745 名に横断的質問紙調査を実施し、L2 WTC およびその関連要因が年齢によって受ける影響を明らかにした。各学年 85 名を無作為抽出し、一元配置分散分析を実施した。その結果、国際的志向性、動機づけ、L2 コミュニケーション能力の認知、L2 コミュニケーション能力における不安感において統計的な有意差をもって、数値の減少が確認された。</p>	研究	p. 50
h	<p>専科教員と担任教師の授業を見る視点の違い —授業モニタリングによる指導観の比較— 中村香恵子(北海道科学大学)・志村昭暢(北海道教育大学)・佐々木智之(北海道科学大学)・坂部俊行(北海道科学大学)</p> <p>本研究の目的は、専科教員と担任による質の高い教育の実現のため、立場の違いによって英語授業を見る視点にどのような特徴があるのかを明らかにすることである。すべての英語授業を team teaching で行っている専科教員 1 名と担任教師 2 名を研究の対象とした。分析の結果、それぞれの教師から専門的知識や児童理解の違いにといった枠組みを超えた特徴が抽出された。</p>	研究	p. 51

13:00-13:50 賛助会員プレゼン【 A106 】

司会：堀田 誠 (北海道教育大学)

- (1) NHK プレキソ英語 そのまま使える小学校英語教材  
英語の授業はこれだけで OK! テレビ番組から生まれた教材集  
株式会社 NHK エデュケーショナル p. 54
- (2) 早期英語教育：理論と実践、そして次のステップへ 活気ある授業にするためのヒント  
ナショナルジオグラフィックラーニング p. 55
- (3) 英語への理解と、学ぶ楽しさを子どもに 授業の質と効率を高めるカシオ エクスワード  
カシオ計算機株式会社 p. 56
- (4) CLIL (クリル) で学ぶ「使える英語」 Guess What! で楽しく学ぶ英語とケンブリッジ英語検定  
ケンブリッジ大学出版 ELT p. 57
- (5) 「小学校英語 SWITCH ON!®」英語学習パッケージ  
株式会社 mpi 松香フォニックス p. 58
- (6) チャンツとチャンクで身につく音感 キッズクラウン 場面で話せる英単語 Part1  
株式会社三省堂 p. 59
- (7) 世界へはばたくファーストステップ ~世界基準で測る TOEFL®ファミリー最初のテスト~  
グローバル・コミュニケーション&テストイング p. 60

14:00-15:00 ワークショップ

1. 実践報告の準備と発表の仕方 —誰に、いつ、何を、どこで、なぜ、どのように?— 【 A106 】 p. 62  
司会：アレン玉井光江（青山学院大学）  
発表：阿部 始子（東京学芸大学）・湯川 笑子（立命館大学）・西田理恵子（大阪大学）・酒井 英樹（信州大学）
2. 思考・判断・表現等に迫る、高学年の外国語指導の提案  
—「見方・考え方」や、新学習指導要領「目標」を手がかりに— 【 A110 】 p. 63  
司会：濱中 紀子（元香川県直島町教育委員会）  
発表：秦 潤一郎（大分大学教育学部附属小学校）
3. 3,4年生のやり取り～『Let's Try!』に入る前に～ 【 A308 】 p. 64  
司会：大田 亜紀（別府大学短期大学部）  
発表：新海かおる（春日部市立武里小学校）
4. 通常学級における特別支援教育を含めた支援の在り方：子どもの特性にあった指導の工夫（入門編） 【 A311 】 p. 65  
司会：佐藤 玲子（明星大学）  
発表：大谷みどり（島根大学）
- ⑤ CLIL による教科横断的授業づくり  
—すべての児童の「生きる力」を育む学びの実現のために— 【 A312 】 p. 66  
司会：物井 尚子（千葉大学）  
発表：山野 有紀（宇都宮大学）

15:15-16:45 基調講演 【 A106 他】

p. 68

司会：粕谷 恭子（東京学芸大学）  
『英語授業の報告で大切なものは何か—授業実践報告の充実を目指して—』  
講演者：竹内 理（関西大学）

※ 第2会場（A110）・第17会場（A308）・第19会場（A312）に映像配信

17:15- 懇親会 【 E棟 1F】

司会：大垣 康行（札幌市立真駒内公園小学校）・額田さやか（札幌市立屯田南小学校）

大会 2 日目 7 月 21 日 (日)

9:00～10:00 課題研究発表 1～2

小学校での CLIL 活動実践とその効果 【A308】

p. 72

司会：上原 明子 (都留文科大学)

発表：安達 理恵 (愛知大学)・阿部 志乃 (横須賀学院小学校)・榎本 洋子 (大阪教育大学)・北野 ゆき (守口市立さつき学園)・竹田 里香 (姫路獨協大学)・松延亜紀 (甲南女子大学)・安田万理 (AIM English House)

リテラシー教育の視点に基づく Storytelling 活動

小学生の英語読み書き能力を養う「Learning by Storytelling の開発」【A312】

p. 74

司会：畑江 美佳 (鳴門教育大学)

発表：小野 尚美 (成蹊大学)・高梨 庸雄 (弘前大学)・田縁 真弓 (ノートルダム学院小学校)

9:00～10:00 特別講演 【A106】

p. 76

新学習指導要領全面実施に向けて、指導と評価の在り方について考える

司会：中村 香恵子 (北海道科学大学)

講演者：直山 木綿子 (文部科学省 初等中等教育局 視学官)

※第 2 会場 (A110) に映像配信

10:10～12:00 自由研究発表 口頭発表 (2) ③10:10-10:40 ④10:50-11:20 ⑤11:30-12:00

司会：佐々木 雅子 (秋田大学)				
A110	③	<p>「小学校英語 Can-Do 及びパフォーマンス評価～思考・判断・表現力及び主体的に学習に取り組む態度をいかに測るか～」</p> <p>長沼君主 (東海大学)・加藤拓由 (岐阜聖徳学園大学)・幡井理恵 (昭和女子大学附属昭和小学校)・俣野知里 (京都大学附属桃山小学校)・萬谷隆一 (北海道教育大学札幌校)・泉恵美子 (関西学院大学)・森本敦子 (帝塚山学園帝塚山小学校)・黒川愛子 (帝塚山大学)・大江太津志 (京都市立百々小学校)・田縁真弓 (ノートルダム学院小学校)</p> <p>本研究では、新教材に基づいた段階的 Can-Do 評価によるタスク設計と、思考・判断・表現や主体的に学習に取り組む態度を引き出す活動の工夫を行い、タスクをパフォーマンス評価として用いるためのルーブリック開発を試みた。各観点で内容面の「単元固有の評価」と言語面の「プレゼンテーション評価」の枠組みからパフォーマンスを記述し、評価すべき場面と項目を絞り、思考・判断・表現等の深まりを見とれるよう工夫を行った。</p>	実践	p. 78
	④	<p>小学校英語 Can-Do 及びパフォーマンス評価実践における児童の変容</p> <p>泉恵美子 (関西学院大学)・幡井理恵 (昭和女子大学附属昭和小学校)・田縁真弓 (ノートルダム学院小学校)</p> <p>2020 年度より小学校高学年で外国語科が開始され、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点から評価を行うことになる。本研究では、2つの私立小学校6年生を対象に『We Can! 2』を参考に単元を計画し、パフォーマンス課題を設定し、Can-Do 振り返りとルーブリックによる評価の実践を行った。その過程における児童の変容並びに評価の概要と結果、今後の課題等を考察する。</p>	実践	p. 79

	⑤	<p><b>「読み」「書き」の基礎スキルに関する児童の Can-Do 評価</b> アレン玉井光江(青山学院大学)</p> <p>本発表では、文字学習に関して児童がどのように自分たちの「読み」「書き」能力を評価しているのかを4段階の Can-Do を用い研究した結果を報告する。対象となったのは公立小学校の高学年 92 名であり、定期的に Can-Do 評価を実施し、その変化を記述式の振り返りとともに検証した。その結果自己評価の妥当性が認められ、児童と教師が学習目標やスキルの獲得について共通理解を持つことできたことがわかった。</p>	研究	p. 80
	司会：深澤 清治 (広島大学)			
	③	<p><b>“Can-Do” と We Can Global Scale of English の “Can-Do” ディスクリプタを使用した「We Can」の実践的分析</b> 佐藤ケイト(北海道科学大学)</p> <p>Global Scale of English の若年学習者向け Can-do リスト(GSE YL Can-do リスト)は、国際的プロジェクトの一環として、6 歳-14 歳の学習者の言語学及びコミュニケーション力のニーズに合わせて作られた機能的ディスクリプタ。この研究では、GSE YL Can-do リストの細かなディスクリプタが、日本の小学校での英語教育にどの程度活用し得るものかを検証する。</p>	研究	p. 81
A201	④	<p><b>JES ジャーナルのシステマティックレビュー</b> 小学校英語における研究動向 本田勝久(千葉大学)・田所貴大(東京学芸大学連合大学院)・星加真実(千葉大学)・染谷藤重(上越教育大学)</p> <p>本研究は、JES ジャーナル第 3 号から第 19 号 (2003-2019) までの掲載論文をシステマティックレビューによって分析し、研究動向と研究方法を検証する。まず、学習指導要領の改訂における研究動向を検討するため、データの属性からキーワードを概観する。次にシステマティックレビューを実施し、研究分野と研究構造を検証する。さらに、抽出した実践研究を研究方法の観点から分析し、学会の研究活動の特徴を把握する。</p>	研究	p. 82
	⑤	<p><b>生徒の自発的 L2 発話を促進する教室談話 コーパスに基づく調査</b> 片桐徳昭(北海道教育大学)・大橋由紀子(ヤマザキ動物看護大学)</p> <p>小学 5 年生の英語授業 6 クラスの発話データをもとに使用言語とインフォメーションギャップを中心としたコーディングを行い、使用言語別、そして発問別・応答別に教師と生徒のインタラクションを調査した。教師・生徒ともに情報伝達の発話が質問の発話より多く観察される中、生徒の自発的 L2 発話が真正要求によって引き起こされている一方で、多くの場合生徒の予測可能な発話が L2 でなされたということを報告する。</p>	研究	p. 83
	司会：大谷 五十二 (びわこ学院大学)			
A202	③	<p><b>小学校外国語活動におけるプロソディ指導</b> —音響音声分析を元にした楽器の活用— 岡本真砂夫(姫路市立八幡小学校)</p> <p>アゴゴドラムのような楽器を用いると、日本語と英語のリズムの違いに合わせてピッチの違いも表現することができる。しかし文で指導をする際、リズムの取り方や高低の使い分けが難しいと感じた。そこで ALT や HRT、デジタル教材、児童の音声を音響分析し、楽器を利用したプロソディ指導の可能性を探った。Prosogram の分析結果から、ピッチの高低や音節に合わせて打楽器を活用する基準を設定できる可能性が高まった。</p>	研究	p. 84

	④	<p><b>5年生から英語活動を経験した学習者の英文音読パフォーマンス音読速度と音読正確性からの分析と考察</b> 西村浩子(関西学院大学)</p> <p>本研究は、小学校5年から外国語活動を体験した学習者が高校2年生3学期になった時の英語能力を、彼らの英文音読パフォーマンスから探り、さらに今後への示唆を得ることを目的とする。その結果、文字から音への正確な変換には、まだ課題が残るものの、定型表現の処理は、定型以外の表現と比べてより迅速であることが明らかになった。</p>	研究	p. 85
	⑤	<p><b>小学校現職英語担当教員の発音・発音指導力向上支援について</b> <b>英語発音・音声指導への意識と発音の実態から</b> 大嶋秀樹(滋賀大学)</p> <p>小学校現職英語担当教員の英語の発音・音声指導への意識と英語発音の実態、その後の英語発音力向上支援による意識と発音の向上の有無を明らかにする。その上で、令和2年度からの小学校中学年での外国語活動、小学校高学年での外国語科(英語)の全面実施を控えての、小学校現職英語担当教員の英語発音・音声指導力向上支援の意義・方策について議論する。</p>	研究	p. 86
A203	司会：高木 修一(福島大学)			
	③	<p><b>チャンツ指導における明瞭性の向上と児童の内省の特徴</b> <b>—質問紙調査における自由記述回答に基づく計量テキスト分析—</b> 中川右也(鈴鹿高等学校)・箱崎雄子(大阪教育大学)</p> <p>英語の超分節の特徴に焦点を当てた音声指導を行い、明瞭性の成績の伸びと児童の内省(ふり返り)の浅深の度合いとの関連性を明らかにする目的で実験を行った。その結果、明瞭性の伸びが顕著な児童は活動自体の楽しさを実感し、英語の韻律的特徴をより論理的に捉えていることが分かった。練習に対しポジティブな印象を持たせ、より深い気づきを促すためにも、活動に楽しさを実感させる要素を盛り込む必要性を感じた。</p>	研究	p. 87
	④	<p><b>聴覚障害児童が在籍する通常小学校の英語学習環境の実際調査</b> <b>—インクルーシブな通常学級・個別指導連携体制の音声指導を目指して—</b> 河合裕美(神田外語大学)・松尾理恵(船橋市立船橋小学校)・高山芳樹(東京学芸大学)</p> <p>聴覚障害児童が在籍する通常小学校の英語学習環境について、教室騒音、聴覚障害児童の英語分節音の知覚・産出能力、教員の合理的配慮や英語指導への意識、保護者の英語教育や通常学級に対する意識等の観点から実態調査を行った。さらに、担任教員が個別取り出しによって、聴覚障害児童に英語音声を指導した。これらを概括的に報告し、通常学級と特別支援学級の連携支援体制、英語音声指導法構築、教員研修の必要性を示唆する。</p>	研究	p. 88
⑤	<p><b>小学校ALTと共に授業を振り返る</b> <b>Small Talkの研修の試み</b> 宮本由美子(上田市教育委員会)・折橋晃美(佐久市立野沢小学校)</p> <p>本研究はTeacher Talkの指導法のため、ALTと小学校教員を対象とした研修の報告である。参加者はペアでSmall Talkを行った後、協働授業の映像を視聴し、Teacher Talkの工夫への気づき、自身の授業のリフレクションと、ディスカッションを行う。最後にTeacher Talkの方略を明示的に学び、再度Small Talkを試みて事前事後でどのように変化したか、ALTと共に振り返る。</p>	実践	p. 89	

司会：新海 かおる（埼玉県春日部市立武里小学校）				
A204	③	<b>Small Talk での児童の発話はどのように変容していくのか</b> <b>—中間交流での教師の働きかけとの関係から—</b> <b>西本有希(北海道教育大学附属札幌小学校)・内野駿介(北海道教育大学)</b> Small Talk の繰り返しによって児童の発話がどのように変容するかについて、5年生の児童2名を対象に調査を行った。児童同士で即興的に会話する Small Talk やそれに準じた活動と中間交流を単元を通して実施したところ、①中間交流で扱った表現を直後の活動で児童が用いる場合と用いない場合があること、②一度学んだ表現でも次時になると使用されなくなる場合があること、の2点が明らかになった。	研究	p. 90
	④	<b>小学校英語における paraphrase(言い換え)活用の可能性</b> <b>児童・教員・教員養成の面から</b> <b>西崎有多子(愛知東邦大学)</b> 英語を英語で学ぶことは、児童にとっても教える教員にとっても不安が伴う。教員が paraphrase (言い換え) する方法を学び活用することにより、児童は英語のまま英単語を獲得することができ、教員は英語を使った授業を行いやすくなり、英語で言い換えられたまま理解する学習環境が期待できる。教員養成の段階からの習慣を付けを含めて、それぞれの立場で、どうやって paraphrase が活用できるか可能性を探る。	研究	p. 91
	⑤	<b>小学生用需要語彙リストの開発</b> <b>小中の教材におけるカバー率の視点から</b> <b>佐藤剛(弘前大学)</b> 本研究は、小学生が学習するべき語彙を学習者が触れるであろう語彙をどの程度含んでいるか(カバー率の高さ)から選定することを目的とする。Let's Try!やWe Can!、海外のリーダーのテキストデータからリストを作成し、それに含まれる語彙の、Let's Try!、We Can!、中学1年生用の教科書におけるカバー率を測定することで小学校から中学校を通して触れる可能性の高い語彙リストの開発を試みた。	実践	p. 92
司会：川村 一代（皇學館大學）				
A210	③	<b>小学校英語における Directed Motivational Currents (DMCs)の可能性</b> <b>～児童自身が「進歩を感じられるフィードバック」の工夫～</b> <b>加瀬政美(千葉県旭市立滝郷小学校)</b> Dörnyei は、DMC を「長期間の行動を鼓舞し、それを支え、急激な動機づけの衝動や高まり」とであると定義している。指導者はどの場面で、どんなきっかけを与えれば、学習者の DMC を引き上げられるのか。それが小学生に可能なのか。そのきっかけは、言語活動の間に入れる児童自身のフィードバックであることに注目した。学校現場の8ヶ月間の授業における児童の言語産出語彙数と動機付けの変容を調査した研究を発表する。	研究	p. 93
	④	<b>児童の学習意欲を高める英語授業の試み</b> <b>ブレンディッド・ラーニングの枠組みを取り入れた学習形態の提案</b> <b>角谷尚希(奈良県葛城市新庄小学校)</b> 様々な研究・調査から「英語の学習が好きではない児童」が一定数いることは明らかになっており、勤務校でも3割近い児童が「英語の学習が嫌い」という実態がある。その改善のために、「これまで主流であった一斉指導」と「個別最適化された学びの提供」と「他者との対話・協働」の3つを位置付けた学習形態(ブレンディッド・ラーニング)を取り入れ、実践したところ、学ぶ意欲、WTC、パフォーマンスの向上が見られた。	研究	p. 94

	⑤	<p><b>タスクが日本人英語学習者の動機付けに与える影響</b>  <b>—オリジナル辞典づくりの実践から—</b>  <b>小木曾智子(筑波大学大学院)</b></p> <p>本研究の目的は、タスク型プロジェクトが学習者の動機付けに与える影響を明らかにすることである。小学3・4年生の児童157名を対象に、「オリジナル辞典を作ろう!」と題したプロジェクト(辞典作成・スピーチ)を実施し、その効果を検証した。学習者の振り返りや、動機付け尺度の質問紙(Yashima et al., 2009)の結果から、タスクの効果は学年によって異なる可能性があることが示唆された。</p>	研究	p. 95
A211	司会：上原 明子(都留文科大学)			
	③	<p><b>外国語の教科化に向けた教職員の意識調査と授業実践の分析</b>  <b>～教育課程特例校を活かした3年間の研究成果～</b>  <b>引山大士(高槻市立大冠小学校)・和田博之(高槻市立北日吉台小学校)</b></p> <p>大冠小は、2016年度から教育課程特例校となり、低・中学年の外国語活動、高学年の外国語科を意識した授業づくりや効果的な短時間学習のあり方について検討した。他の公立小学校と比べて段階的な準備を行い、研究体制を整備できたが、2020年度の本格実施を前に、改めて教職員の意識調査と授業分析を実施した。本発表では、「教職員の意識調査の結果および授業実践の分析」、「児童の意識変化と聞く力の向上」を報告する。</p>	研究	p. 96
	④	<p><b>英語専科教員の小学校英語に対する意識に関する研究</b>  <b>教科化に向けたA県の実態・実践例から</b>  <b>岡崎浩幸(富山大学)</b></p> <p>本研究では、今後増加されることが予想される英語専科教員(専科)の小学校英語に対する思いや考えを明らかにする。専科の意義、担任への配慮、必要な資質・能力や英語力について専科の意識を調査する。専科に必要な資質として、小学校文化の理解、子どもの発達段階への理解が必要であると考え、子どもたちに瞬時に既習の表現を使って応える英語力が必要だと考えている。</p>	研究	p. 97
	⑤	<p><b>ICTの即時フィードバックによる授業改善の試み</b>  <b>—英語授業をよりコミュニカティブに—</b>  <b>石塚博規(北海道教育大学旭川校)</b></p> <p>本研究は、客観的な視点から授業を見ることが可能なCOLT(Communicative Orientation of Language Teaching)スキームをタブレット上で利用することを可能にするMobile COLTを用いて、小学校の英語授業を分析し、それを元に質的なフィードバックによる振り返りを行うことで英語の授業研究が大きく進展するという仮説を立てて実験的な方法で検証したものである。</p>	研究	p. 98
A212	司会：階戸 陽太(北陸大学)			
	③	<p><b>教科化に向けて教師が作る授業 ～We Canを生かした授業づくり～</b>  <b>四方堂欣美(横浜市立子安小学校)</b></p> <p>教科化に向けて準備が進み、たくさんの勉強会も開かれている。少しずつ形が見えてきている。  しかし、教師間では教科化への意識の差や授業づくりへの不安、マネジメントへの不安などぬぐい切れていないのも確かである。  今回、教師にも児童にもアンケートを取り、クラスの実態に合わせ、教師が授業をマネジメントし、組み立てながらつくる授業の実践を行った。その取り組みと実践を発表する。</p>	実践	p. 99

	④	<p><b>理想の小学校外国語授業についてのビリーフとイメージの変容に関する総合考察</b>  <b>児童英語教員養成における大学生 8 名のケーススタディに基づいて</b>  <b>篠村恭子(松江工業高等専門学校)</b></p> <p>本研究は、大学での児童英語教員養成関連の授業を受講した学生の「理想の小学校外国語授業」についてのビリーフやイメージが、年間を通してどのように変容するのかを分析した質的研究である。まず、抽出した 8 名の学生について個別に分析し、その後、それらを総合的に考察した結果、ビリーフの変容については 13 の変容の特徴や変容の要因に関する特徴、理想の授業イメージの変容に関しては 3 観点 7 項目の特徴が明らかになった。</p>	研究	p. 100
	⑤	<p><b>小学校教員養成課程の短期海外研修プログラム開発</b>  <b>—現地校の授業実習を目標に CLIL で学び英語力向上を目指す—</b>  <b>小川隆夫(聖学院大学)</b></p> <p>本研究ではアデレードにあるフリンダース大学の IELI (Intensive English Language Institute) の協力を得て、現地保育園と小学校での授業実習を目標に CLIL を活用した児童学と英語力向上を図る 28 日間のプログラムを試みた。授業では CLIL の 4 つの C を軸とした授業を行ったが授業実習という目的と必然性を持って学んだことにより実践的な英語力の向上が見られた。</p>	研究	p. 101
司会：大田 亜紀 (別府大学短期大学部)				
A301	③	<p><b>バックワードデザインによる外国語指導</b>  <b>2018 年度における 5 年生、6 年生の授業実践から</b>  <b>根本章子(茨城県取手市立桜ヶ丘小学校)</b></p> <p>昨年度、外国語科・外国語活動の指導の先行実施を行っていた前任校において、CAN-DO リストを元に We Can 1, We Can 2 の各単元にパフォーマンス活動を設定し、バックワードデザインによる指導を行った。その結果、児童の主体的な学習態度と、指導者の授業改善につながることを示唆された。発表の中では、実施したパフォーマンス活動とその指導計画、そして児童の様子をビデオで見せていただく。</p>	実践	p. 102
A301	④	<p><b>TT によるコミュニケーションの提示</b>  <b>～子どもが参加したいと思える場をつくる～</b>  <b>木村翔太・名瀬浩司(東京学芸大学附属世田谷小学校)</b></p> <p>本発表では、小学校の英語の授業を TT で行う意味や、1 人だけでなく 2 人の教員で授業を行うということのメリットについて、英語という教科の特性を踏まえて再考することである。今回 TT で実践した授業では、子どもがコミュニケーションの場面に徐々に巻き込まれていき、教員同士の会話から気づいた言語規則を用いてやりとりに参加しようとする姿が見られた。この姿から TT で授業をつくる価値について検討する。</p>	実践	p. 103
	⑤	<p><b>オリジナル絵本作成と帯活動での暗唱の取り組み</b>  <b>中山貴子(中部大学)</b></p> <p>Let's Try! 1 Unit9 の学習題材の「絵本」での単元目標の一つは「日本語と英語の音声やリズムの違いに気付き、誰かと尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ」である。この目標を児童へ自然な形で浸透させ、主体的な学習を促すことを目的に活動した。1) 児童全員が担当し「オリジナル絵本」を作成する自主的活動と、2) 他校との交流において、絵本と暗唱録音の互いの視聴は、相乗的効果を示した。</p>	実践	p. 104

司会：秋山 敏晴（北海道科学大学）				
A302	③	<b>We Can!を使った1年間のプロジェクト重視の英語学習</b> <b>—移行期6年生の1年目の実践—</b> <b>白土厚子(東洋大学)</b> 本研究は、We Can! 2 を使用した6年生への1年間のプロジェクト重視の英語学習が、参加児童にどのような影響を与えたか、言語的・情意的側面から Project-Based Approach の枠組で調査し、その成果と課題を考察する。そのため4技能を使ったどの活動も学期毎のプロジェクトのゴール達成に繋がるよう We Can! の Unit を組み合わせて指導案を作成し、その結果を量的・質的に分析した。	実践	p. 105
	④	<b>「小学校外国語(英語)」全面実施に向けた移行期2年目の取組</b> <b>～愛知県尾張旭市の小学校英語教育推進のあゆみ～</b> <b>鈴木由季子(愛知県尾張旭市立東栄小学校)</b> 愛知県尾張旭市では、中学年で15時間、高学年で50時間の移行措置として2年目を迎えた。1年目の実践を踏まえて、教育課程を再編成し、来年度の全面実施に向けてスムーズに移行できるように努めている。外国語専科教員の在り方や子どもたちの英語への向き合い方への変化の扱いながら、移行措置2年目の取り組みを報告する。	実践	p. 106
	⑤	<b>郷土について語る英語力をはぐくむ外国語教育</b> <b>—地域素材を活用する外国語教育を通して—</b> <b>平野誠一(銚子市立明神小学校)</b> 銚子市では、外国語を通して海外に目を向けながら、郷土のことを見つめ直し、ふるさとについて語るができる英語力を育てる外国語活動の地域素材を活用した教材や単元を開発してきた。本研究では、本市の各小学校の外国語活動において、郷土について語る英語力を育むためにどのような実践をしてきたかを紹介し、地域素材を活用した外国語活動の有効性や課題を明らかにしたい。	実践	p. 107
司会：川井 一枝（宮城大学）				
A303	③	<b>「LとRとラリルレロ」の明示的指導の効果</b> <b>—ローマ字論争に最終決着をつけるために—</b> <b>山本玲子(京都外国語大学)・池本淳子(宇治市立西小倉小学校)</b> 訓令式かへボン式かの論争をこれ以上継続することは実りが少なく、ローマ字と英語の違いの明示的な指導法の開発が急務であると考察し、へボン式に統一する条件にない学校においてもその混乱を最低限に抑えるための指導法を開発した。4年生への実証授業の結果、効果が認められ、国語では訓令式に触れるとしてもあくまで「日本語の音への気づき」にとどめ、間を置かずへボン式の指導へ移行することが望ましいと結論づけた。	研究	p. 108
	④	<b>ジョリー・フォニックス指導効果検証の試み</b> <b>新潟県南魚沼市の取り組みから</b> <b>加藤茂夫(新潟大学)・入山満恵子(新潟大学)・山下桂世子(英国 Ashbrook School)・渡邊さくら(南魚沼市教育委員会)</b> 新潟県南魚沼市および新潟市の小学校5、6年生を対象として、約半年間のジョリー・フォニックス指導の有無が、児童の日本語および英語における音韻認識・操作効率に与える影響を比較検証した。指導を通して、英語の音素と文字の対応をより細かく明示的に対応させて習得を促すことにより、指導後の児童の英語音韻認識効率が高まったとともに、日本語における音と文字の操作効率の向上にも肯定的な影響を与えたことが示唆された。	研究	p. 109

	⑤	<p>主体的に文字を書くことができる児童を育てる外国語科の実践 —タスク活動を取り入れた1単位時間の教材の工夫を通して— 河村昌宏(福岡県小郡市立三国小学校)</p> <p>本研究では、場面や状況に即した目標表現や目標語彙を使用しながら、思考・判断している姿を「主体的」と定義し、実践を通して主体的に文字を書くことができる児童の育成を目指した。目的性や必然性があり、かつ、文字を段階的に認識する活動をタスクとして単元に取り入れ、大文字と小文字を中心に扱う単元において、文字を書く「積極性」「認識性」「正確性」を検証した。</p>	実践	p. 110
A304	司会：名畑目 真吾（筑波大学）			
	③	<p>語彙研究から得た「通説」は児童に適応できるか 大人を対象とした研究と児童を対象にした研究の比較 金山幸平(北海道教育大学旭川校)</p> <p>本稿の目的は、従来の語彙研究で得られた知見が、小学校で英語を学ぶ児童にも適応可能かどうかを検証することである。数多くの研究では高校生や大学生などの大人の学習者を実験の対象としてきたので、その結果がそのまま日本の児童に応用可能かどうかはまだ議論の余地がある。本発表では、すっきりと定着しつつある語彙学習、語彙指導における「通説」を紹介し、大人の学習者と児童を対象にした研究結果を比較する。</p>	研究	p. 111
	④	<p>小学校高学年に対する英語絵本を使った読みの指導 —読み聞かせを音読につなぐ試み— 安藤真理子(東京学芸大学大学院)</p> <p>小学校における「読み」の指導法のひとつとして、英語絵本を教材に読み聞かせや音読活動による音のインプットを行い、高学年児童が聞こえた英語の音をどの程度文字と結びつけられるようになるのか、また英語の文や単語をどの程度一人で声に出して読めるようになるのかを検証した。その結果、絵本を使って英語をかたまりとしてインプットすることにより児童に音と文字を結びつけ英文を丸ごと再生できる可能性があることが示された。</p>	研究	p. 112
	⑤	<p>読み聞かせを取り入れた児童の英語での受容能力の育成 町田智久(国際教養大学)・村上雅美(由利本荘市教育委員会)・佐々木真智子(由利本荘市立由利小学校)・丹野紋子(由利本荘市立西目小学校)</p> <p>本発表では、読み聞かせを取り入れることで、児童の英語での受容能力(聞く・読む)を伸ばせるのかについて概観する。担任教師による大型本を活用した読み聞かせ活動や、児童間での読み聞かせ活動、さらには家庭学習での音読活動などを通して、英語のインプット量の増加を試みた。発表の中では、担任教師が用いた様々なストラテジーや、読み聞かせを進めるための教育委員会や学校内の支援体制などについても示していく。</p>	実践	P. 113
A305	司会：山崎 祐一（長崎県立大学）			
	③	<p><b>Development of a New Primary School English Curriculum and Textbooks in Myanmar</b> Brian Gaynor(Muroran Institute of Technology)・James M Hall(Iwate University)</p> <p>2014年から、国際協力機構(JICA)と協力して、ミャンマーは外国語カリキュラムの改革を始めました。2019年6月現在、1年生から3年生の教科書がミャンマーの全学校に配布されています。新しいカリキュラムと教科書は前のものと劇的に異なっています。この発表では、新旧の教科書とカリキュラムを比較し、それらに対する教師の反応をまとめます。</p>	研究	p. 114

	④	<b>主体的・対話的で深い学びの視点で実施する英語絵本の読みあい</b> 松本由美(玉川大学) 新学習指導要領における主体的・対話的で深い学びの内、小学校外国語活動は、コミュニケーションの素地となる資質・能力を育成する点において主体的・対話的であることを内包するが、英語学習を始めたばかりであるという点において、深い学びに結び付けることには周到な準備を要する。そこで英語絵本の双方向のやり取りである「読みあい」を、外国語活動を主体的・対話的で、かつ深い学びにつなげる可能性の一つとして提案したい。	研究	p. 115
	⑤	<b>オーストラリアの姉妹校との交流を通じた授業報告</b> <b>定期的なウェブカメラ交流による児童への効果と学習展開の変化</b> 井上みちこ(フリーランス メルボルン在住)・尾澤知典(横浜市立緑園東小学校) オーストラリアの姉妹校との交流にウェブカメラを使い「ペア児童への自己紹介や日本文化紹介、教科学習との連携」を実践している。その結果、児童は英語学習に対して好意的な印象を持つことができたことや教科学習の中に英語を入れることでその使用・応用場面が増えた。また英語で何とかして相手に伝えるために身振り・絵・写真・実物等を工夫して用いる姿が見られた。本件は昨年の、姉妹校交流の概要に続く発表である。	実践	p. 116
A306	司会：異 徹(岐阜大学)			
	③	<b>アメリカ合衆国シアトル市の小学校との交流</b> <b>日常の中で外国語を使う場の設定</b> 日吉英智(武蔵村山市立第九小学校) 英語の学習では、学習したことが使える場面があることで、より効果的になると考えられる。本校では、2年前からアメリカ合衆国ワシントン州シアトル市の小学校との交流を行っている。このことで、本校児童にとっては、英語を使わざるを得ない場面を作っている。このことで、児童は英語が通じるということを楽しむことができている。また、授業での工夫により、さらにコミュニケーション活動へと発展できると考える。	実践	p. 117
	④	<b>小学校英語における国際理解教育を育む教科横断型の実践</b> 小林翔(茨城大学)・吹越菜央(府中市立府中第三小学校) 本研究は、公立小学校における外国語活動、道徳、総合的な学習の時間を通じた教科横断型の取り組みがどのように参加児童と教員の英語教育や国際理解教育に影響を与えたかを考察するものである。参加した公立小学校の5年生3クラス74名と、学習発表会を見学した小学校教員8名によるアンケート結果を量的及び質的に調査し、学校行事と関連付けて学習発表会の場でその成果を発表した教科横断型の授業実践の効果を明らかにする。	実践	p. 118
	⑤	<b>小学校英語の早期化・教科化に対応した指導</b> <b>—5・6年生に焦点を当てて—</b> 長谷川修治(植草学園大学) 本研究では、2020年度から完全実施される新学習指導要領(2017)で、小学校英語の早期化(3・4年生)・教科化(5・6年生)に対応した指導をどのようにすべきかを、5・6年生に焦点を当てて探った。「外国語活動」2年間70単位時間から本格的「英語」の授業へという学習過程が類似している旧学習指導要領における中学校1年生に対し、英語の学習経験や学習状況に関する意識調査を2013年11月に実施し分析した。	研究	p. 119

A307	司会：倉田 伸（長崎大学）			
	③	<b>福島の公立小学校における CLIL 授業実践 —児童英語教育ゼミの卒業協働プロジェクト『スイミー』— 坂本ひとみ（東洋学園大学）</b> 本発表は、福島の公立小学校 1～3 年生合同の英語活動における『スイミー』を題材とした CLIL 授業の実践報告である。これは、大学の児童英語教育ゼミ 4 年生全員が携わる卒業協働プロジェクトであり、児童も大学生もともに、新学習指導要領の 3 つの柱に沿った、学びの意欲や考える力、多様な人と協働する力が高まることを仮説とし、その結果を質問紙調査や小学校教員へのインタビューから見取る研究である。	実践	p. 120
	④	<b>アルファベットの手書き大文字の正答率 —指導順序は正答率に影響するか— 澁谷裕子（東京家政大学）</b> 先行研究では、アルファベット手書き文字は文字ごとに正答率が異なるとされている。本研究は指導する文字の順序が異なると、指導の効果が異なるかを調査した。指導順序を ABC 順と文科省ワークシート（形状類似型）順に分け、テストを事前、事後、遅延で実施した。結果、指導順序による正答率に差はなかったが、いずれの指導も効果があり、その学習効果は持続性があった。この結果及び誤答分析から教育的示唆について議論する。	研究	p. 121
⑤	<b>低学年の外国語活動におけるインタラクティブな授業 —第 3 学年の「聞くこと」「話すこと」へとつなげていく授業を目指して— 酒井成彦（栃木市立赤麻小学校）</b> 発表者の勤務する市では、第 1・2 学年で外国語活動を年間 10 時間実施している。低学年のうちから外国語活動に親しむことができる一方で、時間数の少なさゆえに英語に触れ、「英語って面白い！」という感覚を育てる程度で精一杯というのが実情である。そこで、低学年からよりインタラクティブな授業を展開していく方法を考え、児童が楽しみながらよりコミュニケーションへの意欲を高める工夫や手立てを明らかにしていく。	実践	p. 122	
A308	司会：福原 史子（ノートルダム清心女子大学）			
	③	<b>Small Talk に見られる Teacher Talk の方略 MERRIER Approach からの分析 和田順一（松本大学）・酒井英樹（信州大学）・青山拓実（信州大学）・大内瑠寧（信州大学大学院）</b> 本研究は、文部科学省『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』にある Small Talk のスクリプトをティーチャートークの方略から分析する。授業でのインプット、インタラクション、アウトプットの機会は、第二言語習得を促進する条件を整える意味でも重要である（Loewen, 2015）。本研究では、Small Talk に第二言語習得を促進すると考えられている特徴がどの程度含まれるかを明らかにした。	研究	p. 123
	④	<b>言語活動を中心とした外国語科の授業作り 5 年生の実践に焦点をあてて 酒井英樹（信州大学）・上條大樹（信州大学教育学部附属松本小学校）・中村伸哉（長野市立緑ヶ丘小学校）</b> 信州大学教育学部附属幼稚園、附属松本小学校、附属松本中学校では、「学びの総合化」をテーマにカリキュラム開発研究を行っている。小学校においては 4 年次より英語科という教科を実施している。本発表では、言語活動を通してどのように学びを生じさせたかに焦点をあてて、5 年生で実施した「Welcome to Matsumoto～ALT に松本の魅力を伝えよう～」の単元の実践報告を行う。	実践	p. 124

	⑤	<p>ことばへの気づきを促す絵本の読み聞かせ —シラバスの作成と検証—  <b>田中真由美(武庫川女子大学)・中村伸哉(長野市立緑ヶ丘小学校)・上条大樹(信州大学教育学部附属松本小学校)</b></p> <p>信州大学教育学部附属松本学校園で行われている幼小中一貫教育の推進プロジェクトにおいて領域「ことば」が小学校1～3学年で新設された。この領域は国語科と外国語活動を融合したものであり、国語科、外国語活動、両教科等に跨る内容を扱う時間で構成される。発表者らは両教科等に跨る内容を扱う時間で日本語と英語の相違点や類似点に関する気づきを促すことを目的とした絵本読み聞かせ授業のシラバスを作成した。</p>	実践	p. 125
A311	司会：濱中 紀子（元香川県直島町教育委員会）			
	③	<p>子どもの伝えたい「思い」を高める言語活動  —現在進行形の指導の実践—  <b>小竹空翼(啓明学園初等学校)</b></p> <p>6年生の児童を対象に、子どもの伝えたいという「思い」を大切にしたい現在進行形の指導を実践した。練習を通して決められたやり取りを暗記させるのではなく、子どもが思わず現在進行形の文を聞きたく・言いたくなるような場面設定の工夫を試みた。指導においては、文法の明示的説明や覚えさせるための練習は行わなかったが、単元の終盤では、多くの児童が自ら考えたことを、現在進行形を用いて自分の言葉で話し、書くことができた。</p>	実践	p. 126
	④	<p>小中連携した英語教育実施に向けての課題  —3年間の小学校現場からの実践を通して—  <b>高木浩志(宝塚市立逆瀬台小学校)</b></p> <p>中学校から小学校へ異動し、小学校の先生に外国語科の導入について、四年間で研修を行いながら、徐々に先生の認識を変えて、この新しい外国語科の必要性を認識させなければならなくなった。国語科の研究校であった勤務校でも、そして外国語科の担当者会でも、そして県の組織としても。その指導の必要性と研修を進めていくことについて、小学校の先生への理解をどのように進めていくか。その取り組みを発表したい。</p>	実践	p. 127
	⑤	<p>スムーズな小中接続に向けてのパフォーマンス課題と評価の取組  ～思考力・判断力・表現力の育成のために～  <b>黒川愛子(帝塚山大学)・山川拓(京都市立九条塔南小学校)</b></p> <p>本研究の目的は、児童・生徒の思考力・判断力・表現力の育成をめざしたパフォーマンス課題の設定と評価が英語学習への意欲及びスムーズな小中接続にいかに関与するかを調べることである。小学6年生から中学卒業までの参加者の意識調査結果から、参加者が筆者らが設定したパフォーマンス課題と評価が4技能向上に効果があると受け止め、英語学習への意欲を継続し、スムーズな小中接続につながるということが明らかになった。</p>	実践	p. 128
A312	司会：多良 静也（高知大学）			
	③	<p>授業の助っ人！小学校英語 DDL サイトの開発と公開  <b>西垣知佳子・物井尚子・星野由子・石井雄隆(千葉大学)</b></p> <p>意味伝達を重視する英語コミュニケーション活動の中で、学習者の注意を語彙・文法に向け、気づきを引き出す指導にDDL (data-driven learning) がある。DDLは学習者がコーパス(データベース)を観察し、言語規則を発見して学ぶ学習方法で、言語規則の知識の理解と定着、発見力の育成等の効果が確認されている。本研究では、小学校レベルの英文を誰でも無料で調べられるDDLサイトを開発し公開した。</p>	研究	p. 129

	<p>④ 語彙・文構造の学習から引き出されるメタ言語の分析 安部朋世(千葉大学)・西垣知佳子(千葉大学)・佐藤悦子(我孫子市立我孫子第一小学校)・神谷昇(千葉大学)・小山義徳(千葉大学)・星野由子(千葉大学)・石井雄隆(千葉大学)</p> <p>次期小学校学習指導要領では、英語の語彙や文構造に関する知識の理解が求められる。発表者らは、英文とそれに対応する日本語訳を併記するパラレルコーパスを使い、英語の語彙・文法への「気づき」を引き出すDDL (data-driven learning) を実践した。本研究では、DDL で引き出された気づきからメタ言語を収集し、入門期学習者のメタ言語能力を、「文法用語」や気づきの「種類」「深さ」等から観察した。</p>	研究	p. 130
	<p>⑤ 文構造への気づきを促すコミュニケーション活動の試み —「思考力・判断力・表現力等」を高める単元構成— 佐藤悦子(我孫子市立我孫子第一小学校)</p> <p>本研究は、文構造への気づきを取り入れたコミュニケーション活動による文構造への意識の高揚や思考力の育成への効果を検証した。具体的には小学6年生を対象に「思考力・判断力・表現力等」を高める単元構成の中で、データ駆動型学習を行った。実践授業の結果、言葉のきまりに意識を向ける力が育ち、児童自身が適切な表現を選び、英語を使って自分の伝えたいことを表現しようとする姿が確認できた。</p>	研究	p. 131

10:10~12:40 自由研究発表 ポスターセッション(2) (A309) コアタイム 11:20 - 12:20

a	<p>英語でフリートーク？本当にできるの？ 英語を使うことへの「安心」を生む掲示物のススメ 寺内健(防府市立松崎小学校)</p> <p>「英語でフリートークができるかもしれない」朝の会で行っているフリートークの振り返りで、ある児童が発言した。「できっこないよ」「そもそも英語で質問ができないし答えるのも無理だよ」「でも、できたらかっこいいし、やってみたい」など、期待と不安の入り交じった子どもたちの反応であった。そこで「安心」をキーワードに子どもが安心して英語でフリートークができる効果的な手立ての一つとして掲示物の活用に取り組んだ。</p>	研究	p. 132
b	<p>小学校2年生での実践「ローマ字を知ろう」 ローマ字学習と外国語学習への意識を高める指導の工夫 榎本はる(天理市立前栽小学校)</p> <p>本研究では、アルファベットに音と名前があることを明示的に指導することや子音と母音の結合する様を聞くことがローマ字学習にも役立つと考え、ローマ字やアルファベット学習歴のない小学2年生に対し、ローマ字学習と外国語学習への意欲を高めることを目的とした授業を行った。児童の授業を通して見られた態度の変容より中学年における適切な教材・指導法について考える。</p>	実践	p. 133
c	<p>We Can!に掲載された英語を書く活動に関して —教員対象のアンケート調査を基に— 中村洋(ニセコ町立ニセコ中学校)</p> <p>新学習指導要領への移行期間1年目が終了した2019年3月に、継続してWe Can!を使用した授業を行った教員を対象にアンケート調査を行った。新たに始まった「書く活動」に関しては、60%以上の教員が、We Can!で扱われる活動の分量がちょうどよいと回答した。一方難易度に関しては、「書く活動」だけではなく「話す活動」も含め、We Can!のアウトプット活動を難しいと回答する教員が多い傾向が見られた。</p>	研究	p. 134

d	<p>学級担任による朝学習の時間を活用したフォニックスの実践 ローマ字学習による英語読みへの影響を考える 清水由美(東京都日野市立潤徳小学校)</p> <p>小学三年生からの外国語活動の導入により、三年生の児童は一年の間にローマ字とアルファベットと同時に出会うことになった。本研究の目的は、小学三年生の児童がアルファベットの音の認識をしていく過程において、ローマ字の学習が与える影響を明らかにすることである。そのことによって、児童が混同しやすいローマ字の読みと英語の読みの指導のあり方や指導の順序について見つめ直す。</p>	実践	p. 135
e	<p>学習困難のある小学生の英語学習のつまずき 小学校教員に対する調査結果より 川合紀宗(広島大学)・大谷みどり(島根大学)・松宮奈賀子(広島大学)</p> <p>本研究では、学習困難児童が英語学習の際に示すつまずきについて教員に調査し、多様な児童が在籍する通常の学級で外国語教育を行う上での合理的配慮の在り方を探った。結果、音韻から綴りへの変換や、読んだり聞いたりした内容の理解、正しい文法や構文による書記、単語や句などの復唱や意味のまとまりの理解に困難を示す児童がおり、こうした児童の多くが、母語でも論理思考や黒板の視写、指示理解に困難を示すと回答があった。</p>	研究	p. 136
f	<p>教員養成における、児童の気付きを支援する実践的知識の形成 小学校教員による外国語科授業記録を用いて 藤井佐代子(中国学園大学)</p> <p>小学校教員養成において、本実践報告では、小学校の熟達教員による授業実践事例のスク립トを用いることで、指導教員との対話を通して、学生が児童とのやりとりに関するどのような実践的知識を、どのように形成するのかを、明らかにする。そこでは、学生が考えた様々な対応策や熟達教師の対応を児童の思考・情動・言語獲得の面から考察することで、実践的知識を、指導教員の支援を得ながら、学生は学ぶことができた。</p>	実践	p. 137
g	<p>小学校における英語絵本の効果的な読み聞かせの方法について 池上真由美(吉備国際大学)</p> <p>英語絵本の読み聞かせにおいて、実物投影機で拡大して提示する効果について検証した。公立小学校の6年生と3年生児童に対して、8冊の英語絵本の読み聞かせを行った結果、実物投影機は、大きくて見やすい利点があるものの、絵本の絵が光って見にくい、読み手の表情やジェスチャーが視野に入りにくいというデメリットがあった。中学年児童にとって、視覚情報はより大きなリソースであり、拡大して映すことは効果的であると考える。</p>	研究	p. 138

13:40~14:50 自由研究発表 口頭発表(3) ⑥13:40-14:10 ⑦14:20-14:50

A110	司会：矢野 淳(静岡大学)	研究	p. 140
	<p>⑥ CLIL再考その1 CLIL、EMI、CBI、イマージョンはどう違うのか? バトラー後藤裕子(ペンシルバニア大学)・湯川笑子(立命館大学)</p> <p>CLILは、その広義な定義のゆえ、さまざまな実践がCLILの名のもとで行われており、その効果や意義を把握することが困難な状況になっている。そこで本発表では、先行理論に基づき、CLILおよび類似用語のCBI、EMI、イマージョンの定義を整理し、用語の混乱や誤用を避けるために、狭義のCLILの定義を提案することを目的とする。</p>		

		<p><b>CLIL 再考その 2</b>  <b>日本で CLIL あるいは他教科を取り入れた英語授業を構築する時の留意点</b>  <b>湯川笑子(立命館大学)・バトラー後藤裕子(ペンシルバニア大学)・松尾由紀(立命館中学校・高等学校)</b></p> <p>この発表では、本学会別発表の「CLIL 再考その 1」で示した CLIL や類似の概念の整理をふまえ、英語教育担当者の立場から、CLIL、および、CLIL とは呼べないものの、他教科の学習内容をうまく取り入れた英語授業を構築する際にどのような点に留意すべきなのかを明らかにしたい。それぞれのタイプの授業において、明確な留意事項を加味し整理していくことで実践の質の向上が望めるのではない。</p>	研究	p. 141
A202	司会：物井 尚子 (千葉大学)			
	⑥	<p><b>日本人英語学習者を指向した音韻指導への示唆</b>  <b>日本人学習者の習得が困難なフォニックスの観点から</b>  <b>浅川尚仁(慶応義塾大学院)</b></p> <p>英語初等教育における音韻指導の重要性が唱えられている。フォニックスなどを用いた音韻指導は取り入れられているものの、指導時間の不足・指導者の不足などの問題が指摘されている。それらの問題は音韻指導の多くが英語母語話者向けに設計されたことに起因すると考えられるため、本研究では日本人を指向した音韻指導法の設計を目指し、日本人学習者が習得困難である音素について実データを基に考察し、音韻指導への示唆を行う。</p>	研究	p. 142
	⑦	<p><b>小学校外国語教科化に向けての校内研修体制</b>  <b>一学級担任の不安軽減に焦点を当てて</b>  <b>佐藤裕子(東京学芸大学連合大学院)</b></p> <p>本研究の目的は、小学校外国語が教科化する中で、担任の不安を軽減しながら、担任が英語授業を進めていくための校内研修体制の構築について、その効果検証を行うことである。検証の結果、管理職と連携した校内研修体制の確立と教員の実態に合わせた研修内容により、担任の不安軽減に対して、一定の効果を上げたことが明らかになった。今後は、組織で支援していく校内研修体制を構築していく必要がある。</p>	研究	p. 143
A203	司会：本田 勝久 (千葉大学)			
	⑥	<p><b>小学校現職教員と大学英語教職課程履修者による協働実践</b>  <b>一自治体教育委員会と大学連携プログラム—</b>  <b>國分茅絢(千葉県立京葉高等学校)・長田厚樹(神田外語大学児童英語教育研究センター)</b></p> <p>福島県 A 村現職小学校教員と、神田外語大学英語教職または児童英語教員養成課程履修中の学生が、英語指導能力の向上を目指して、村内の幼稚園や小学校で TT 形式の英語授業を実践した。事前に現職教員は指導技能や演習を含む教員研修を受け、学生は指導案の作成や演習等の指導を受けた。教員にとっては授業運営能力が高められ、教職学生にとっては実際の教育現場で子どもに英語を教える機会となる「協働」の取り組みを紹介する。</p>	実践	p. 144
	⑦	<p><b>英語音声指導に関する教師の信念と授業実践の変容過程</b>  <b>熟達教師の省察的語りに焦点をあてて</b>  <b>和田あずさ(兵庫教育大学)</b></p> <p>授業実践と授業者の心的過程を解釈することをとおして、特定の現場における現象の意味を見出そうとする試みは、授業者の教師としての熟達化を促すとともに、他の教師にとっても、類似の経験を基にした追体験をしたり実践知を共有したりすることができるという意義を持つ。本発表では、熟達期の小学校教師を事例とし、参与観察と継続的な省察によって導出された英語音声指導とその背景にある教師の信念の変容過程について報告する。</p>	研究	p. 145

司会：山本 玲子（京都外国語大学）			
A204	⑥	<b>小学校高学年の単語認識方略</b> <b>—絵葉書解読タスク活動で見られた方略の分析から—</b> <b>伊勢恵（東北福祉大学）</b> 本研究は私立小学校6年生を対象とし、グループで「絵葉書解読タスク」取り組み、どのような単語認識能力を有しているかを検証した。タスク後の自由記述を分析した結果、Semantic Cues, Picture Cues, Word Cues 等の様々な方略を認識していることが分かった。小学校高学年であってもタスク設定や内容を工夫することで、現在の英語知識を確認しながら方略に気づかせることが可能である。	研究 p. 146
	⑦	<b>日本の過去に目を向けた小学校英語教育</b> <b>—CLIL は明治時代にもあった？—</b> <b>二五義博（海上保安大学校）</b> 明治時代にはすでに小学校英語教育が行われており、CLIL の研究をする際にも海外ばかりではなく日本の過去にも目を向ける必要があると考える。本発表は、明治時代の小学校用国定英語教科書の分析を通して、「内容」「言語」の2つの軸から、どのような他教科の内容が取り入れられ、どのような言語の習得が目指されていたのかを考察する。	研究 p. 147
司会：大谷 五十二（びわこ学院大学）			
A211	⑥	<b>海外の大学における TEFL プログラムを活用した研修の効果</b> <b>小学校英語専科教員の研修方法の一例として</b> <b>名淵浩司（東京学芸大学附属世田谷小学校）</b> 本発表では、小学校での英語専科教員の研修として、海外の大学での TEFL (Teaching English as a Foreign Language) プログラムを活用した研修の成果と課題を明らかにし、今後増えていくと予想される小学校英語専科教員の研修としての可能性を探る。本大学の研修プログラムが、小学校英語専科教員にとってどのような価値があるものかということを中心にしたい。	実践 p. 148
	⑦	<b>Small Talk をスライド活用でインプットする小学校英語</b> <b>視覚的ヒントを与え、やりとりを楽しむ音声インプット活動を通して</b> <b>栄利滋人（仙台市立国見小学校）</b> Small Talk だけを聞いて児童が理解するのはなかなか難しい実態がある。視覚的に考えるヒントになる情報がまだまだ必要である。現場の教員は発音に自信が持てないために Small Talk の活動自体を敬遠してしまう傾向がある。そこで、Small Talk での英語の会話をネイティブ音声で iPad に取り込み、スライドに写真やイラストを提示して、音声を流しながら行う活動を実践した時の効果を紹介する。	実践 p. 149
司会：猫田 和明（山口大学）			
A212	⑥	<b>小学校教員を目指す大学生の児童に向けた英語の語り</b> <b>語りの特徴と学生自身による課題の認識</b> <b>松宮奈賀子・川合紀宗（広島大学）</b> 本研究では、具体的な指導を受ける前段階での「①大学生による児童に向けた語りの特徴」と、「②学生自身が課題として認識できること」を明らかにすることを旨とする。11名の調査協力者の語りの特徴と、学生自身が映像を振り返って指摘する「目指す語り像に近づくための工夫」とを検討した結果、視覚支援の必要性はほぼ全員が認識しているものの、英語の言い換えなどの効果については理解できていない実態が示された。	研究 p. 150

	⑦	<p>大学生の授業見学を小学校教員の外国語科研修に活かす試み  <b>学生の振り返りと教員へのインタビュー</b>  <b>階戸陽太(北陸大学)</b></p> <p>本研究は、教職を目指す大学生の授業見学を小学校教員の外国語科の研修に活かす試みについて、大学生の振り返りと小学校教員へのインタビューから分析し、外国語科の研修について提案することを目的としている。小学校教員のインタビューを通して示された小学校教員の気づき・変化から、大学生の授業見学を通じた小学校外国語科の研修について提案を行う。</p>	研究	p. 151
司会：福原 史子（ノートルダム清心女子大学）				
A301	⑥	<p><b>ことばの教育として母語と連携する小学校外国語活動の実践研究</b>  <b>教科書を活用した授業実践事例を通して</b>  <b>王林鋒(福井大学)</b></p> <p>小学校外国語活動・外国語科の先行実施が始まり、学級担任の強みを活かした小学校ならではの外国語教育の在り方を具体化していく必要がある。次期学習指導要領において、母語と外国語を有機的に関連づけた「ことば」という視点の提起がある。本研究では「ことばの教育」という観点から母語と外国語の連携によりことばへの気づきを育てる授業実践を検討する。</p>	実践	p. 152
	⑦	<p><b>小学校外国語におけるリスニング教材の有効的な手立て</b>  <b>～We Can!を用いた現場での実践より～</b>  <b>井上ナタリー(札幌市立平岡南小学校)</b></p> <p>現在小学校外国語の授業に用いられている We Can ! は多くのリスニング教材を含んでおり、指導の工夫が重要である。本研究では、5、6年生を対象にリスニング教材を用いて指導方法と理解度の関係について調査を行なった。様々な手立てを加えその回答状況、さらには振り返りによる自己評価を分析し、その結果を報告する。</p>	研究	p. 153
司会：秦 潤一郎（大分大学教育学部附属小学校）				
A302	⑥	<p><b>小学校英語の教科化を見据えた移行期の取組</b>  <b>北海道寿都町の小学校外国語教育の実践</b>  <b>八木啓太(寿都町立寿都小学校)・中村香恵子(北海道科学大学)</b></p> <p>本町は、外国語活動が始まる以前より実践を積み上げている。特に「外国語教育強化地域拠点事業」「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」などの文部科学省より指定を受けてきた経緯もあり、「CAN-DO リスト」「パフォーマンステスト及び評価」の実践と研究を重ねてきた。また、加配教員や英語指導職員との協働体制をとりながら、担任が進める授業作りに取り組んでいる。本発表では、その成果と課題について発表する。</p>	実践	p. 154
	⑦	<p><b>子ども同士の相互評価を支援するシステムを用いた実践と検討</b>  <b>倉田伸(長崎大学)・江嶋弘海(老岐市立瀬戸小学校)</b></p> <p>小学校の英語教育においてコミュニケーション活動を主体的・対話的に行うために、相手に配慮したコミュニケーション活動に対する評価観点に焦点を当てて子どもたちが相互評価や振り返りができるシステム（以下、伝え合いアプリ）を活用した実践を行った。授業実践について検討した結果、子どもたちのコミュニケーション活動や評価内容に変容が見られた。</p>	実践	p. 155

司会：畑江 美佳（鳴門教育大学）				
A303	⑥	<b>児童の「書く」ことに関する実態調査 学習指導要領の目指すものの実現可能性を探る 兼重昇(大阪樟蔭女子大学)・小笠原剛士(旺文社)・瀧本耕平(東西条小学校)</b> 本実態調査は、移行期やそれ以前も含めて、先進的に We Can! などを利用しながら外国語の授業を受けてきた児童が、学習指導要領で示されている「書くこと」に関する目標に到達できているのか調査するとともに、その評価方法の検討し、実態を分析することで、目標とされている姿を達成を実現するための手立てについて、私立学校での取り組みをもとに提案する。	研究	p. 156
	⑦	<b>高学年「読むこと」「書くこと」につなげる3年生文字指導の在り方 —アルファベット大文字の導入と、国語科ローマ字指導の工夫を通して— 西 薫(岐阜県羽鳥市立小熊小学校)</b> 文字指導で問題であると感じるのは3年生国語科ローマ字指導との関りである。①大文字よりも形の認識の難しい小文字が国語科ローマ字で先に導入されている②5年生から導入される「文字を書くこと」を3年生の段階で指導しなければならない。③文字のもつ音の知識がないまま、ローマ字を読んだり書いたりする学習に取り組まなければならない。そこで、効果的にローマ字指導とアルファベット導入とをつなぐ実践を試みた。	実践	p. 157
司会：名畑目 真吾（筑波大学）				
A304	⑥	<b>小学校における異文化交流のための絵本選書の試み 佐々木雅子(秋田大学)</b> 本研究は、異文化間コミュニケーションは目標言語を発達させるとともに異文化理解を促進し得るという視点から、日本や外国の絵本を調査し、小学校外国語教育における異文化交流に相応しい絵本を選定することを目的とする。ガイドド・リーディングの考え方をを用いた授業での絵本使用についても検討を加え、「コミュニケーションとしての英語」を小学校外国語科で展開することを最終的な目標とする。	研究	p. 158
	⑦	<b>児童の思いを生かした読み聞かせの活動 ～Let's Try! Unit 9 Who are you?～ 星笑美子(宇治官市立岡本西小学校)</b> 教師の絵本の読み聞かせ後に児童から出てきた「わたしもいつか英語でわかりやすく読んであげたい。」という思いを生かし、Let's try! Unit9 Who are you? に取り組んだ。読む活動はまだ行わない3年生だが、どの子も楽しく学び合い「分かる」「できる」喜びを味わうことができるよう手立てを考え、グループで協力し合って、紙芝居で相手に分かるよう工夫して活動できるよう授業を実践した。	実践	p. 159
司会：大谷 みどり（島根大学）				
A305	⑥	<b>台湾、スペイン、イギリスの英語による図画工作科教育からの日本への示唆— 現地の小学校の現状調査から— 藤井康子(大分大学)</b> 本研究は、図画工作科の特性を生かした小学校外国語活動・外国語との教科横断型学習教材を開発する試みである。本発表では、CLIL等の英語教育と図画工作科教育に関する台湾、スペイン、イギリスの公立小学校やバイリンガル小学校等の現状調査（2018年～2019年実施）から得られた知見を報告するとともに、日本における英語による図画工作科教育の教科横断型学習の在り方について考察する。	研究	p. 160

	⑦	<b>フィンランド型英語プラクティスのモデル提示の試み 小学校英語教科化後を見据えて</b> <b>米崎里(甲南女子大学)・川見和子(帝塚山中・高等学校)・多良静也(高知大学)</b> フィンランド外国語教育は学校教育で多大な成果をあげていると言われて いる。本研究は、今後日本の小学校英語教科化後を見据え、小学校でも「読む こと」や「書くこと」が加わり、かつ文構造や語順などの文法的な要素も教え ていくと仮定すれば、フィンランドの小学校英語教科書で用いられているプラ クティスを日本の教科書の一単元に応用するとどのような展開になるか、フィ ンランド型のモデルを示すことを目的とする。	研究	p. 161
司会：佐藤 剛 (弘前大学)				
A306	⑥	<b>高学年児童に効果的な授業構成についての一考察 —TBLT 型構成と改訂型 PPP・TBLT 折衷型構成との比較検証—</b> <b>瀧本哲弘(明石市立中崎小学校)</b> 本研究の目的は、高学年児童に対して、どのような授業構成が効果的なのか を検証するものである。参加者は日本の公立小学校へ通う6年生児童であり、 TBLT 型授業構成のみの小単元指導グループと、改訂型 PPP・TBLT 折衷型授業構 成の小単元指導グループに分けられる。そして、小単元終末の外国人講師との インタビューで得られたデータを比較することによって、目的にせまりたいと 考えている。	研究	p. 162
	⑦	<b>小学校外国語科における学習評価の在り方についての試作 学習の過程を子どもとともに振り返る取り組み</b> <b>高田実里(熊本大学教育学部附属小学校)</b> 本実践は、高学年における外国語科への移行を意識し、子どもと教師がとも に「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」につい て、次なる学習および指導に生かすための評価の在り方を模索するために行っ た試みである。パフォーマンス評価や振り返りの記述をその後の学習に生かす には、どのような視点をもつべきか見いだすことを目的とする。その取り組み と子どもの姿をもとに、今後の志向としたい。	実践	p. 163
司会：川井 一枝 (宮城大学)				
A307	⑥	<b>小学生の英語コミュニケーション能力 5年生の英語コミュニケーション能力の実態</b> <b>堀尾邦子(元北九州市立小森江東小学校)・堀尾亜以(北九州市立深町小学校)</b> 児童は少ない英語学習を通して僅かながら英語能力を身に付けている。本 研究は、児童が ALT との会話のために英語表現を事前に準備し、会話しやすい 環境を整え、複数の児童と ALT との英会話を通して児童の英語コミュニケーシ ョン能力を測ったものである。英語力は不十分でもコミュニケーションを成立 させようとする児童の努力には、児童の性格や意欲・非言語の能力も含まれる 方略能力が様々に見られた。	研究	p. 164
	⑦	<b>Small Talk の継続的な実施による児童生徒の発話パフォーマンスの変化</b> <b>山口美穂(岐阜市立茜部小学校)・巽徹(岐阜大学)</b> 小学校第1学年から第6学年までの英語科の授業で、授業開始直後に5分か ら10分の既習表現を使った「話すこと(やり取り)」の帯活動を継続して行っ た。取組みの前後で、児童に、同じテーマで発話パフォーマンステストを実施 し、発話総語彙数と使用した単語の種類、使用した英語表現について分析した。 また、第6学年の児童は卒業後の追跡調査を行い中学1年生で同様のパフォー マンステストを行い比較検証した。	研究	p. 165

司会：上原 明子（都留文科大学）				
A308	⑥	<b>小学校英語活動における英語発音指導書の提案</b> <b>Let's Try からの汎用性を求めて</b> <b>西尾由里(名城大学)・上斗晶代(県立広島大学)・戸井一宏(前広島市立戸坂城山小学校)</b> 小学校3・4年生の英語活動において、教員を対象とした汎用性のある発音指導書を提案する。『Let's Try! 1・2』、『Hi, Friends! 1・2』などのテキスト分析を行い、単語及び分節音の頻度を調べた。その結果を基に、英語母語話者の動画を作成し、日本語と英語の音声の違いを説明し、トレーニングできるような指導書を作成する。	研究	p. 166
	⑦	<b>外国語活動のための音声指導マニュアル</b> <b>—超分節音に焦点をあてて—</b> <b>上斗晶代(県立広島大学)・西尾由里(名城大学)・戸井一宏(前広島市立戸坂城山小学校)</b> 外国語活動の教材『Let's Try! 1, 2』に準拠した発音指導マニュアル作成のため、超分節音に焦点をあてて、発音指導のポイントとなる音声項目の提示順序、記述内容について考察し、提案することを目的とする。各単元における超分節音の分析結果に基づき、出現率が最多の下降調は全ての単元において扱い、上昇調は単元での使用に基づく記述とする。下降上昇調、弱形、単語間連結は難易度を考慮し、段階的記述を行う。	研究	p. 167
司会：山崎 祐一（長崎県立大学）				
A312	⑥	<b>日常にある題材で過去形を扱ってみた</b> <b>—We Can!2 Unit 5 「夏休みの思い出」の授業実践を通して—</b> <b>新海かおる(春日部市立武里小学校)</b> 「いつまでも夏休み気分を引きずらないように。」などと言っているのに、夏休み後、外国語の授業で、3～4週間も夏休みの思い出を扱うのは、担任としては心苦しい。夏休みの思い出ではない話題で、この単元を構成することはできないだろうか？ 扱う主な言語材料を過去形とし、移行期1年目の授業実践、移行期2年目の単元計画の見直しを通して考えてみたい。	実践	p. 168

15:00-16:40	シンポジウム 【A106他】	p. 170
『言語活動を通じた言語習得とは？』		
司会 堀田 誠(JES 副会長・北海道教育大学)		
コーディネーター 萬谷 隆一(JES 顧問・北海道教育大学)		
シンポジスト 山田 誠志(文部科学省 国立教育政策研究所)		
酒井 英樹(信州大学)		
嘉多山葉子(札幌市立石山緑小学校)		
粕谷 恭子(JES 会長・東京学芸大学)		
※ 第2会場 (A110)・第17会場 (A308)・第19会場 (A312) に映像配信		

16:40-	閉会式 【A106他】	司会：岩村 鋭介(札幌市立伏見小学校)
※ 第2会場 (A110)・第17会場 (A308)・第19会場 (A312) に映像配信		

## 第 19 回小学校英語教育学会（JES）北海道大会実行委員会

大会実行委員長	中村香恵子	(北海道科学大学)
大会事務局長	志村 昭暢	(北海道教育大学)
大会副事務局長	坂部 俊行	(北海道科学大学)
大会顧問	秋山 敏晴	(北海道科学大学)
大会顧問	萬谷 隆一	(北海道教育大学)

### 実行委員

麻畑 遥	(札幌市立和光小学校)	佐藤 弘美	(札幌市立真栄小学校)
新井 宏	(北広島市立大曲東小学校)	清水万梨花	(札幌市立北陽小学校)
石塚 博規	(北海道教育大学)	白鳥 晴子	(北海道教育大学)
板倉 宏予	(北海道科学大学)	新保 友梨	(札幌市立あいの里西小学校)
伊藤 芳明	(北海道科学大学)	清野 友香	(札幌市立中の島小学校)
井上ナタリー	(札幌市立平岡南小学校)	相馬 和俊	(室蘭市立みなと小学校)
岩村 鋭介	(札幌市立伏見小学校)	高橋 文	(札幌市立あいの里西小学校)
上野 葉菜	(札幌市立北白石小学校)	竹内 典彦	(北海道情報大学)
内野 駿介	(北海道教育大学)	種谷富茂華	(札幌市立常盤小学校)
大垣 康行	(札幌市立真駒内公園小学校)	鶴田 正道	(札幌市立厚別通小学校)
大木 七帆	(北海道科学大学)	中村 綾子	(札幌市立本町小学校)
太田とも美	(北海道教育大学)	中村 洋	(ニセコ町立ニセコ中学校)
大野 拓恵	(北海道科学大学)	西本 有希	(北海道教育大附属札幌小学校)
大和田真知子	(北海道教育大学)	額田さやか	(札幌市立屯田南小学校)
笠島美奈子	(札幌市立清田緑小学校)	福原 拓紀	(札幌市立手稲東小学校)
嘉多山葉子	(札幌市立石山緑小学校)	銚崎聖太郎	(札幌市立藻岩小学校)
加藤 隆治	(北海道科学大学)	堀田 誠	(北海道教育大学)
金山 幸平	(北海道教育大学)	堀口 聖子	(函館市立あさひ小学校)
笠原 究	(北海道教育大学)	松村 秀明	(帯広養護学校)
川上 大	(札幌市立平岡公園小学校)	三上 奈々	(札幌市立苗穂小学校)
駒木 昭子	(北海道教育大学)	三澤 康英	(札幌龍谷高校)
佐々木 歩	(札幌市立北光小学校)	宮浦 匡典	(石狩市立南線小学校)
佐々木智之	(北海道科学大学)	宮下 隼	(札幌市立小野幌小学校)
佐藤ケイト	(北海道科学大学)	吉川 和伸	(札幌市立西岡南小学校)
佐藤 朋実	(札幌市立資生館小学校)		

大会実施にあたり、多くの方々からご協力いただいたことをここに記し、謝意を表します。

